

— おむすびは、

人と人を結び合わせ、

仲間とする。—



ごはんを食べよう国民運動

20年のあゆみ



ごはんを食べよう国民運動推進協議会設立趣意書

私たちは、「飽食から放食」と言われるように、豊富な食材に囲まれて豊かな食生活を送っていますが、日本の食料自給率は主要先進国の中で最低の水準になっています。

現在、世界中では、日本の人口の7倍もの人々が慢性的な栄養不足に陥っており、今後も、世界人口の急激な増加や地球環境の悪化などにより、世界的な食料不足が懸念されています。このため、私たち一人ひとりが今一度、日々の食生活のあり方を問い直していく必要があります。

私たち日本人は、“お米”を主食に、四季折々の豊かな実りで食卓を彩る独自の食文化を形づくってきました。しかし、食生活の多様化、急速な都市化や核家族化の進展等に伴い、伝統的な食文化のよさが失われ、米の消費量も年々減少しています。この結果、栄養バランスの偏りから若い人を中心に糖尿病や心臓病などの生活習慣病が増加し、また水田の荒廃、農村の弱体化が進んでいます。

こうしたなかで、私たち一人ひとりが、栄養面や安全面からごはんを中心とした日本型食生活のよさを見直し、“お米”を基本とした「健康的な食生活」を送っていくことがなによりも大切です。そのことが、日本の農業を活性化させ、食料生産力の向上はもとより緑豊かな国土の保全にもつながるに違いありません。

21世紀を目前にした今、次の世代を担う子供たちのためにも、国内資源を最大限に活用し、可能な限り国内で自給できるよう、将来に向けて万全の備えを取っておく必要があります。

こうした状況から、国民一人ひとりが“お米”を通じて、これまで先人たちが営々として築いてきた豊かな食文化、美しい日本の自然を将来に継承し、いつまでも健康な生活が送れるよう、消費者をはじめ生産者、学識経験者、団体・企業、国や地方公共団体などが一体となった国民総ぐるみによる運動を展開するため、「ごはんを食べよう国民運動推進協議会」の設立をここに提案し、運動への参同、参画を呼びかけるものです。

平成10年12月22日

【理 念】

- 1 国内で自給可能なお米の重要性を再認識しよう
- 2 水田の価値と農業・農村の役割を再評価しよう
- 3 日本型食生活のよさを改めて見直そう
- 4 伝統文化とお米のかかわりを見つめ直そう



発刊のことば



ごはんを食べよう国民運動推進協議会会長
独立行政法人 国立科学博物館館長 林 良博

稲作は、我が国の食糧生産の主体を担っているだけでなく、さまざまな面で国家の形成にも貢献してきました。弥生時代から現代に至るまで、豊かな景観をつくり出し、地域コミュニティ形成の場として我が国の歴史や地域文化に関わってきました。さらにホタルなどの生き物が生息する生物多様性の向上や、災害防止機能など、その貢献を数え上げればきりがありません。

こうした稲作の恩恵をともに受けている都市と農村の人びとが協働することによって、人口減少と高齢化、さらに食の多様性が進行することによる「ごはん」の消費量の低下と、耕作放棄地が拡大することを少しでもくい止めることができるのではないかと、という期待の下に、平成11年4月、「ごはんを食べよう国民運動推進協議会(以下、国民運動)」が設立されました。

国民運動の会長をお引き受けしたときの心配は、初代会長の木村尚三郎氏と二代目の川勝平太氏はともに著名な文化人であり、農学バカのわたしに三代目が務まるかということでした。国民運動は、1月17日(阪神・淡路大震災の日)を「おむすびの日」と定め、広報活動に取り組んでいました。不安のどん底にいた都市の被災者たちがボランティアによる炊き出し(おむすび)に助けられたことを決して忘れないためです。こうした運動は、全都道府県と各地の組織に支えられた名実ともに全国民の運動として展開されていたので、これ以上のことができるかという心配もありました。

そこで新たな方針として、最盛期の3分の1まで減少した日本酒の消費量の拡大を掲げました。その結果、全国の蔵元による日本酒の多様な商品開発、「日本酒で乾杯」運動、世界的な和食普及、若い人の日本酒嗜好の拡大などと相まって、静かなブームが生まれつつあります。しかし、まだまだ多くの人びとは「お米」の魅力を知りません。

これまでの国民運動はひとつの区切りを迎えますが、新たな出発を迎えるにあたり、「ごはん」に纏わる無数の「こころ温まる物語」や「ちょいと良い小話」を含め、全国的な発信を高めることによって、国民運動の精神が持続することを期待しております。

発刊に寄せて

農林水産省政策統括官 天羽 隆

20年の永きにわたって「ごはんを食べよう国民運動」の取り組みに御尽力いただきました「ごはんを食べよう国民運動」推進協議会の会員各位並びに事務局である兵庫県の方々に厚く御礼申し上げます。

お米の1人当たり消費量は昭和37年度をピークに現在では半減しており、また我が国全体の消費量は毎年約8万トンずつ減少している状況にあります。食料の多くを海外に依存している我が国にとって、国内農業の食料供給力(食料自給力)を強化し、食料自給率を向上させることは主要な課題です。そのためにも、我が国で自給可能なお米について、その消費の減少に歯止めをかけ、優れた生産装置である水田を維持していく必要があります。

このような中で、お米の生産から流通・消費に携わる企業、団体、都道府県など幅広い関係者が一体となって展開された「ごはんを食べよう国民運動」は、消費拡大に向けた非常に有意義な取り組みであり、農林水産省としても当初から連携して取り組んで来たところです。特に、農林水産省が平成18年度から3カ年実施した「にっぽん食育推進事業」においては、「ごはんを食べよう国民運動」の取り組みを日本型食生活推進の全国的なモデルとして支援し、活動地域でのごはんの消費が1週間で1人1杯増えたという成果をもあげていただきました。

この度、設立から20年を節目として、「ごはんを食べよう国民運動」としての活動には区切りをつけられることとなりましたが、国民一人ひとりがお米を通じて豊かな食文化、美しい日本の自然を将来に継承し、いつまでも健康的な生活が送れるようにとの理念が今後も会員の皆様方に引き継がれ、さらに広がっていくことを期待しております。

農林水産省といたしましては、お米の消費拡大の取り組みは引き続き重要であると考えており、それに向けた支援や米飯学校給食の推進、「和食」の保護・継承などとともに、国内において米の需要の約3割を占め、今後とも堅調な需要が見込まれる中食・外食向けのお米の安定取引への支援などに取り組んで参りたいと考えておりますので、皆様の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

発刊に寄せて



ごはんを食べよう国民運動推進協議会副会長
兵庫県知事 井戸 敏三

平成11年4月に設立し、今年、20年の節目を迎える「ごはんを食べよう国民運動推進協議会」。

この国民運動の原点は、平成7年1月17日に発生した阪神・淡路大震災にあります。この時、ボランティアの手で被災地に届けられた炊き出しの「おむすび」が、被災者に希望とぬくもりを与え、私たちはお米の大切さを再確認したのです。

このことをきっかけに、平成9年、兵庫県は「おいしいごはんを食べよう県民運動」を開始しました。その後、行政はもとより、生産者、消費者団体など多くの関係者のご理解とご協力を得て、県民運動は国民運動へと発展したのです。

この国民運動が20年間も継続してきたのは、設立の理念が、年月の経過にも色あせることのない、正鵠を射たものであったからに違いありません。

その一つ目は、食の安全安心につながる「国内で自給可能なお米の重要性を再認識しよう」。二つ目は、地域創生を想起させる「水田の価値と農業・農村の役割を再評価しよう」。三つ目は健康づくりと関連の深い「日本型食生活のよさを改めて見直そう」。四つ目は、和食がユネスコ無形文化遺産に登録されたことに象徴される「伝統文化とお米のかかわりを見つめ直そう」。いずれも、現在、そして未来にも通ずる理念です。

しかし、お米を巡る情勢にも変化が見られます。この20年の間に、米の消費量は2割近く減少し、一方で、おむすびやパックご飯の一人当たり年間消費支出額は4割も増加しました。これは食生活の多様化や高齢・共働き世帯の増加等により、社会のニーズが変化しているためです。また、農業従事者の高齢化も深刻です。今後、こうした時代の変化に対応した柔軟な取り組みが、より一層求められることでしょう。

このたび、国民運動は「ごはんを食べよう国民運動推進協議会」に代わり、ごはん食普及を行う全国団体にその理念を引き継いでいただくこととなります。

主体が代わろうとも、自発的な取り組みを進め、国民運動の理念を未来へと引き継いでいかなければなりません。これこそが、20年間運動に関わってきた私たち会員が果たすべき使命ではないでしょうか。

これからも、ともに力を合わせ、美しい田んぼが広がる豊かな田園風景を守り、ごはんが私たちの食卓を彩りつづける社会を築いていきましょう。

目次

発刊のことば

ごはんを食べよう国民運動推進協議会会長、独立行政法人 国立科学博物館館長 林 良博	1
発刊に寄せて	
農林水産省政策統括官 天羽 隆	2
ごはんを食べよう国民運動推進協議会副会長、兵庫県知事 井戸 敏三	3

運動の展開と発展

ごはんを食べよう国民運動の展開	8
I ごはんを食べよう国民運動の始まり	9
II 全国各地での展開へ	15
III 「1.17 おむすびの日」が全国に浸透	19
IV 「にっぽん食育推進事業」の実施	23
V 広報・情報発信～多くの方に国民運動を知ってもらう～	28

主な活動の記録(平成11年度～29年度)

平成11年度	34
平成12年度	34
平成13年度	35
平成14年度	36
平成15年度	36
平成16年度	37
平成17年度	38
平成18年度	38
平成19年度	39
平成20年度	39
平成21年度	40
平成22年度	40
平成23年度	40
平成24年度	41
平成25年度	41
平成26年度	42
平成27年度	43
平成28年度	43
平成29年度	43

活動を振り返って

おむすびパワーは永遠に!	44
ごはんを食べよう国民運動推進協議会理事・幹事長 四條畷学園大学教授(総合地球環境学研究所名誉教授) 嘉田 良平	

未来へつなぐ

北海道.....	48
福島県.....	49
新潟県.....	50
静岡県.....	51
三重県.....	52
滋賀県.....	53
岡山県.....	54
熊本県.....	55

歴代会長が語る国民運動

ごはんを食べよう国民運動推進協議会設立記念座談会	58
「ごはんを食べよう国民運動への期待」(抄録) 平成11年4月23日 都道府県会館 中村 靖彦(NHK解説委員)【進行】 木村 尚三郎(東京大学名誉教授) 渡辺 文雄(俳優)	
ごはんを食べよう国民運動推進協議会講演録	60
「早寝、早起き、朝ごはん運動に向けて」(抄録) 平成19年6月19日 虎ノ門パストラルホテル 川勝 平太(静岡文化芸術大学学長/肩書きは当時のもの)	
「お米の消費を拡大するには」	62
林 良博(東京農業大学教授/肩書きは当時のもの)	

資料編

ごはんを食べよう国民運動推進協議会会則	66
ごはんを食べよう国民運動推進協議会歴代役員名簿	68
ごはんを食べよう国民運動推進協議会会員名簿(平成30年8月現在)	70
ごはんを食べよう国民運動推進協議会歴代幹事名簿	72
にっぽん食育推進事業イメージキャラクター	74



運動の展開と発展



■ごはんを食べよう国民運動の展開

年 度	ごはんを食べよう国民運動の展開	出来事(社会の動きなど)
平成6年度		食糧法公布 阪神・淡路大震災発生
平成11年度	ごはんを食べよう国民運動推進協議会設立	食料・農業・農村基本法制定 食生活指針策定
平成12年度	<div style="border: 1px solid red; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> I 国民運動の始まり(~14年度) ・全国大会の開催 ・語りべ10万人作戦の展開 ・シンポジウムの開催 </div> <div style="border: 1px solid blue; padding: 5px;"> III 「1.17 おむすびの日」が全国に浸透(~29年度) ・「おむすびの日」記念日登録 ・おむすびの日記念アンケート </div>	鳥取県西部地震発生 芸予地震発生
平成14年度	<div style="border: 1px solid teal; padding: 5px;"> V 広報・情報発信 ごはん食キャンペーンの展開(~16年度) ・ごはんがすすむ我が家自慢のこの一品&ショートエッセイの募集 ・四季ごとにごはんを組み合わせた朝ごはん献立の募集 </div>	
平成15年度	<div style="border: 1px solid orange; padding: 5px;"> II 全国各地での展開へ 国民運動大会開催(~22年度) (埼玉県、広島県、静岡県、岩手県、長崎県、兵庫県、岡山県、新潟県、石川県、福島県、秋田県、富山県、奈良県、福井県、栃木県、滋賀県(16県、開催順)) </div>	十勝沖地震発生
平成16年度	<div style="border: 1px solid blue; padding: 5px;"> III おむすびにまつわる絵てがみメッセージの募集 </div>	新潟県中越地震発生
平成17年度		食育基本法施行 食事バランスガイド制定 第1次食育基本計画策定(H18~22年)
平成18年度 ~19年度	<div style="border: 1px solid green; padding: 5px;"> IV 「にっぽん食育推進事業」の実施主体として活動 展開(~20年度) ・藤原紀香さん起用の広報展開 ・ごはんカンパニー活動 ・保田先生のごはん塾 ・ごはんの学校「ゴーゴーご組」等 </div>	能登半島地震発生 新潟県中越沖地震発生
平成20年度		岩手・宮城内陸地震発生 [FOOD ACTION NIPPON] 開始
平成22年度		6次産業化地産地消法公布 第2次食育基本計画策定(H23~27年) 東日本大震災発生
平成23年度		
平成25年度	<div style="border: 1px solid teal; padding: 5px;"> V 広報・情報発信 ・美りのフェスティバル出展(~28年度) </div>	「和食」 ユネスコ無形文化遺産登録
平成28年度		熊本地震発生 第3次食育基本計画策定(H28~32年)
平成30年度	「おむすびの日」記念日登録の名義人を (公社)米穀安定供給確保支援機構へ変更	米の生産調整見直し 西日本豪雨災害発生

I ごはんを食べよう国民運動の始まり

1 設立の経緯

1-1 阪神・淡路大震災の発生

平成7年1月17日午前5時46分。観測史上初の震度7の激震が兵庫県南部を襲った。直撃を受けた150万都市、神戸は瞬時に壊滅状態に陥った。淡路島、近隣の西宮市、芦屋市、宝塚市などにも大きな被害が発生した。死者は6千4百人を超え、家屋などの損壊数は全壊が約10万5千棟、半壊が約14万4千棟、全焼が約6千棟に及んだ。

家を失い避難生活を強いられた住民は30万人以上。一時的な避難を含めると170万人。多数の被災者が避難所で飢えと渴きに直面しながらも、大きな混乱が起こらなかったのは、まさに奇跡といえる。その奇跡を支えたのは、情報途絶のなか、大渋滞の道路をぬって届けられたたくさんの「おむすび」だった。

真っ先に神戸市北区、西区の農家の、そして県内の、やがて近隣府県の方がおむすびをつくり、被災地へ届けられた。幸いなことに平成6年の秋は豊作で、お米が農協や農家の倉庫に大量にストックされていた。もし、地震が1年前に発生していたら、平成5年の秋はお米が不作だったため、いくら農村に善意があってもお米はなく、大量のおむすびもつくれなかったかもしれない。

改めて、大都市の周辺に農村があること、そこで豊かな食料が生産され、蓄えられていること、そして食料を国内で自給することのありがたさや大切さを強く認識することになった。



炊き出し



ボランティアが活躍

写真提供(阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター)

1-2 兵庫県で「おいしいごはんを食べよう県民運動」を提唱

貝原俊民兵庫県知事(以下、貝原知事)は、阪神・淡路大震災で「ボランティアの皆様から差し出されたおむすびのおいしかったこと、そのことが被災者にもたらした安心感などを考えたとき、お米を巡る諸問題について今一度考え直してみる必要がある」との思いから、生産者、消費者の区別なく広く県民が食料のことを考え、行動するという「おいしいごはんを食べよう県民運動」を提唱した。

この県民運動は、従来からの行政主導の米消費拡大運動に留まらず、県民の幅広い参画を得た中で、①将来危惧される食料危機に対応する食料自給率の向上、②生活習慣病の予防といった健康的な食生活の実践、③環境保全や災害防止機能を持つ水田の多面的機能の評価、④農業・農村の活性化が震災等への備え



となる危機管理という、4つの社会的に大きな意義を掲げ、平成9年度からスタートした。

平成9年度からの2年間は、運動の趣旨・必要性を周知するため、県内各地で約1万8千人の参加を得て、県民会議を約260回開催した。また、推進母体として団体、企業、行政等で構成する「おいしいごはんを食べよう県民運動推進協議会」を平成11年度に設立した。

1-3 おいしいごはんを食べよう県民運動の理念を全国発信

この県民運動が始まって間もない時期から、貝原知事は「この運動の理念は各都道府県共通の課題であり、兵庫県が音頭をとって国民運動として全国的に展開すべきである」とし、各方面に働きかけを行った。

農林水産省幹部、国会議員、全国知事会、業界団体、有力企業、学識経験者など多くの方の助言、励まし、協力を得て、国民運動立ち上げへの気運が醸成されていった。

とりわけ、国民運動の立ち上げに重要な役割を果たしたのは、全国知事会であった。国民運動という以上は全都道府県の参加が欠かせない。丁寧に議論を重ね、協議会が発足した平成11年度にすべての都道府県が加入し、名実ともに国民運動としての活動を開始したのである。

なお、当協議会が設立された当時は、平成11年7月に食料・農業・農村基本法が公布・施行されたほか、国民の健康の増進等を図るため、平成12年3月に食生活指針が策定されるなど、農や食に関して新たな展開が図られつつある時期であり、国内で自給可能な“お米”を通じて国民一人ひとりが食料を考え、農業・農村の役割を見直すとともに、健康に良い日本型食生活の実践を推進するとの運動の方向性はまさに時宜を得たものであった。

1-4 国民運動推進協議会発足までの道程

- | | |
|-------------|---|
| 平成10年5月～6月 | 兵庫県農林水産部幹部が分担して全都道府県に趣旨説明と協力を依頼 |
| 平成10年7月3日 | 全国知事会農林商工調査委員会
「趣旨には概ね賛同、具体の内容については引き続き検討」 |
| 平成10年7月8日 | 近畿ブロック知事会議
「全会一致で、運動の趣旨に賛同し、全国的な展開に積極的に協力することを決議」 |
| 平成10年11月5日 | 全国知事会農林商工調査委員会
「広島県を除き、趣旨・事業内容等に賛同を得たが全会一致が原則のため申し合
わせは行わない」 |
| 平成10年12月21日 | 全国知事会議
「趣旨に賛同する。ただし、推進協議会への参加については各都道府県の判断」 |
| 平成10年12月22日 | 設立発起人会(ホテルオークラ東京)
「代表発起人として木村尚三郎東京大学名誉教授を選任、設立趣意書を決定」 |
| 平成11年4月23日 | ごはんを食べよう国民運動推進協議会設立総会(都道府県会館)
○会員数:243会員(山梨県、広島県を除く45都道府県が加入)
○会長に木村尚三郎さん、副会長に貝原俊民さんほかを選任 |
| 平成11年6月15日 | 山梨県が協議会に加入 |
| 平成11年9月21日 | 広島県が協議会に加入(全都道府県が加入) |

1-5 国の進める施策との連携

県民運動の理念を全国へ発信しようとした当初から、貝原知事以下兵庫県の幹部職員が国民運動のあり方について農林水産省各部署、特に食糧庁の指導を仰ぎ、生産・流通・消費に各団体が加入した唯一の全国組織として国民運動推進協議会が設立された。

以降、兵庫県が事務局を務め、国の進める米消費拡大対策事業や食育事業との連携のもとに効果的な活動を展開してきた。

全国知事会 国民運動
コメ消費拡大へ組織
 来年度から シンポなど全国展開

全国知事会議は来年度から四十七都道府県が連携したコメの消費拡大運動に取り組む。生産者団体や小売店、消費者団体などによる全国運動組織を設け、米食文化や農業問題の啓発を狙い、シンポジウムを開くほか、主婦らを対象にした料理教室などを全国で展開する。コメの消費拡大で全国の自治体が手を組むのは初めて。

運動の推進母体「おいしごはんを食べよう国民運動推進協議会」（仮称）の発起人会を八月上旬をめぐりに開催、九九年四月に協議会を発足させる予定。阪神大震災で食糧不足を経験した兵庫県が全国的な消費拡大運動を呼び掛けている。

日本経済新聞 (H10.7.6)



ごはん食べよう国民推進協 設立発起人会が発足

米を通じて農業・農村、環境・食生活を考えたため、兵庫県は二十二日、都内で「ごはんを食べよう国民運動推進協議会」の設立発起人会を発足させた。阪神・淡路大震災の教訓を生かすため、危機管理思想の共有も運動の一つに掲げた。発起人会では「米を通じて先人が築いた豊かな食文化、美しい日本の自然を将来に継承しよう」と、運動への参加を呼びかけた設立趣意書を発表した。会には、発起人（十五人）のうち十三人が出席した。代表発起人には木村尚三郎東京大学名誉教授が選ばれた。発起人の一人の貝原俊良兵庫県知事はあいさつで、三年前の大震災で、県民すべてが温かいおにぎりのありがたさを実感した。同時に、水田の四割に及ぶ生産調整面積、それに飼食、飢餓などと米を取り巻く環境が異常になっていること、に気付いた」と運動の必要性を訴えた。

幅広い階層から同協議会への参加を促すため、会員には生産者、消費者、学識経験者ら個人と企業、自治体、団体などを予定。具体的な取り組は、都道府県などで行われている米消費拡大運動とは趣を異にする。計画では、来年四月に推進協議会を発足させ、米やご飯の果たしている役割、重要性を国民一人ひとりが再認識する活動を行う。

日本農業新聞 (H10.12.23)



2 設立総会、設立記念座談会

平成11年4月23日に設立記念総会を都道府県会館で開催。国会議員(米消費拡大・純米酒推進議員連盟、自民党政調会農林部会)や食糧庁長官の臨席をいただき、設立の趣旨を確認し、勇躍の決意あふれる総会となった。

総会後の記念座談会では、中村靖彦理事(NHK解説委員)の進行のもと、木村尚三郎会長(東京大学名誉教授)と渡辺文雄理事(俳優)の3人が、ごはん、お米、農業・農村、中山間地域の振興など多様な切り口から、「ごはんを食べよう国民運動への期待」について、語り合った。(P58に抄録を掲載)



朝日新聞(H11.6.3)



設立総会(木村尚三郎会長)



設立総会(貝原俊民副会長)

3 語りべ10万人作戦の展開(平成12年度~14年度)

協議会としてはじめに取り組む活動として、「ごはんを食べよう国民運動」を国民一人ひとりに普及啓発し、各自の生活に根ざした実践につなげるため、会員による草の根の普及啓発活動を展開した。

具体的には、会員である団体、企業、都道府県の構成員等が語りべとなり、イベント、シンポジウム、フォーラム、講演会、講習会及び職場、地域、家庭等における様々な機会の活用並びに日常業務、ボランティア活動等を通じて、ごはんを食べよう国民運動の啓発を行う作戦。



実施期間は平成12年度から3年間で、語りべ10万人を目標とし、語りべの活動に必要な共通の啓発資料として小冊子「ごはんを食べよう」を作成し、会員に配布した。

4 全国大会の開催(平成12年度～13年度)

語りべ10万人作戦の展開とあわせて、会員の取り組み気運の醸成を図り、全国に国民運動のメッセージを発信するため、国民運動推進全国大会を企画・開催した。

平成12年度は6月2日に、ホテルニューオータニ(東京都千代田区)で、歌手のロザンナさんを招いてトークショー「日本の豊かな食文化」(聞き手は千葉真由美キャスター)を開催し、新聞等のメディアで大きく取り上げられた。

平成13年度は5月18日に、クロスタワーホール(東京都渋谷区)で、藤岡弘さん(俳優)が「日本の心、お米～伝統を食べる」をテーマに特別講演を行い、話題となった。

5 シンポジウムの開催(平成12年度～13年度)

全国に向けて国民運動の理念を発信するためシンポジウムを企画・開催した。

シンポジウムの模様はNHKでテレビ放映され、農業、文化、健康など幅広い話題の情報発信を行った。

■ 第1回シンポジウム(平成12年11月24日開催、イイノホール(東京都千代田区))

渡辺文雄理事(俳優)が基調講演し、パネルディスカッションでは「食卓で考える日本の未来」をテーマに、中村靖彦理事(NHK解説委員)をコーディネーターに、木村尚三郎会長(東京大学名誉教授)、今井通子副会長(医師・登山家)、貝原俊民副会長(兵庫県知事)のほか、家森幸男さん(京都大学大学院教授)と、星寛治さん(農民詩人)が語らいを広げた。

あわせて、「シンボルマーク」「キャッチフレーズ」「おむすびの日」入賞作品の発表・表彰が行われた。

シンポジウムの様子は、NHK衛星第1テレビ「BSフォーラム」で放映された。

(平成13年3月24日13:00～13:50、再放送3月26日10:00～10:50)

■ 第2回シンポジウム(平成13年12月6日開催、愛知県女性総合センター(名古屋市))

「食を考える国民会議」との共催により「食と農の学びシンポジウム」として開催した。基調講演として女優の中原ひとみさんが「命こそ宝～大腸ガンを克服して」をテーマに講演。その後、「田んぼは日本の命です～食と農を学び健全な生活を～」をテーマにパネルディスカッションが行われた。

シンポジウムの様子は、NHK教育テレビ「金曜フォーラム」で放映された。

(平成14年5月17日23:00～0:15)



6 「知事と語る食と農の県民会議」の共催(平成12年度～13年度)

食料・農業、健康・栄養、環境面から、米やごはん食をめぐる問題について各県の知事が県民とともに考え、語る県民会議を開催した。

平成12年度 4県 秋田、栃木、三重、滋賀

平成13年度 3県 山形、福井、大分

7 「お米カルチャー教室」の共催(平成12年度～13年度)

消費者にお米を通じて「食」「農業・農村」「日本型食生活」等について考える機会を提供し、日本型食生活の実践を推進する「お米カルチャー教室」を開催した。

講演、紙芝居、おむすび教室、試食会、栄養相談コーナーなど、各地で工夫を凝らした取り組みが行われた。

平成12年度 10県 青森、茨城、埼玉、神奈川、静岡、長野、富山、愛知、香川、福岡

平成13年度 7都県 東京、新潟、石川、岐阜、奈良、佐賀、鹿児島

Ⅱ 全国各地での展開へ

国民運動地方大会の開催(平成15年度～22年度)

ごはんを食べよう国民運動をより全国的な運動として展開するため、各地の会員との共催により、シンポジウムやフォーラムを「ごはんを食べよう国民運動地方大会」として毎年全国2か所で開催した。

また、すべての地方大会で「ごはんを食べよう国民運動PRコーナー」を設けて、啓発パネルの展示やクイズ&アンケートなどの啓発活動を行うことで、多くの人々に国民運動を広めることができた。

■平成15年度

1 埼玉県「地産地消フォーラム」(ごはんを食べよう国民運動埼玉大会)

日 時:平成16年1月31日

場 所:浦和ロイヤルパインズホテル(さいたま市)

来場者:650人

内 容:①寸劇、「ごはんお米と私」作文・図画コンクール表彰式
②「ふるさとの味・さいたまの食」試食交流会
③展示及び販売コーナー



2 広島県「お米フェスタ広島2004」(ごはんを食べよう国民運動広島大会)

日 時:平成16年2月28日・29日

場 所:広島県立総合体育館(広島市)

来場者:375人

内 容:①「ヨネスケの「お米」っていいヨネ～」トークショー
②米飯学校給食地産地消推進事例発表会
③お米フェスタPRブース



■平成16年度

1 静岡県「全国お米まつり in しずおか」(ごはんを食べよう国民運動静岡大会)

日 時:平成16年11月4日～7日

場 所:静岡県コンベンションアーツセンター(静岡市)

来場者:92,307人(全体延べ人数)

内 容:①お米日本一コンテスト
②こだわりの米と食のテント村
③全国縦断お米・ごはん食シンポジウム「お米Cafe」



2 岩手県「いわて純情米お宝フェスタ」(ごはんを食べよう国民運動岩手大会)

日 時:平成16年11月20日・21日

場 所:イオン盛岡ショッピングセンター(盛岡市)

来場者:9,441人(全体延べ人数)

内 容:①国際コメ年記念いわて純情米フォーラム
②お米博士クイズ大会予選
③こどもお米サミット



■平成17年度

1 長崎県「ごはんを食べよう推進フォーラム」(ごはんを食べよう国民運動長崎大会)

日 時:平成18年1月27日

場 所:諫早文化会館(諫早市)

来場者:330人

- 内 容:①講演「私たちの食生活と健康を考える」
 ②パネル討議「水田の持つ多面的機能(防災機能)とごはん食のすすめ」
 ③米粉食品の試食



2 兵庫県「防災と食料を考えるフォーラム」(ごはんを食べよう国民運動兵庫大会)

日 時:平成18年2月11日

場 所:兵庫県公館(神戸市)

来場者:350人

- 内 容:①基調講演「災害時の食～阪神・淡路大震災の被災地からの提言」
 ②パネル討議
 ③活動発表(2団体)とブース出展(8団体)



■平成18年度

1 岡山県「米まつり岡山2006」(ごはんを食べよう国民運動岡山大会)

日 時:平成18年10月14日・15日

場 所:岡山県総合展示場「コンベックス岡山」(岡山市)

来場者:60,000人(全体延べ人数)

- 内 容:①お米トークショー
 ②食育の寸劇
 ③岡山の米ソング・ダンス発表



2 新潟県「2006県民こめまつり」(ごはんを食べよう国民運動新潟大会)

日 時:平成18年10月22日

場 所:新潟市産業振興センター(新潟市)

来場者:8,846人(全体延べ人数)

- 内 容:①おむすびづくり大会
 ②ごはんの食べ比べ等“楽しむスペース”設置
 ③ごはんの食味クイズ



■平成19年度

1 石川県「第29回石川の農林漁業まつり」(ごはんを食べよう国民運動石川大会)

- 日 時:平成19年10月13日・14日
 場 所:石川県産業展示館4号館 屋外展示場(金沢市)
 来場者:107,000人(全体延べ人数)
 内 容:①いしかわのお米料理教室
 ②お米のクイズ
 ③地元食材の紹介・販売



2 福島県「ごはんを食べよう!食彩ふくしま地産地消推進フォーラム」(ごはんを食べよう国民運動福島大会)

- 日 時:平成19年11月10日
 場 所:福島県農業総合センター(郡山市)
 来場者:300人
 内 容:①パネルディスカッション
 ②ふくしま秋の味を親子でにぎろう!「おにぎりフェスタ」
 ③お米に関するクイズ



■平成20年度

1 秋田県「第3回食の国あきた県民フェスティバル」(ごはんを食べよう国民運動秋田大会)

- 日 時:平成20年10月11日・12日
 場 所:秋田駅前アゴラ広場・仲小路大屋根下(秋田市)
 来場者:25,000人(全体延べ人数)
 内 容:①地産地消ヒーロー「超神ネイガー」ショー
 朝ごはんの大切さを子どもたちにPR
 ②地元産米を使ったオムライスづくり
 ③お米に関するクイズ



2 富山県「第32回富山県米まつり」(ごはんを食べよう国民運動富山大会)

- 日 時:平成20年10月25日・26日
 場 所:富山テクノホール(富山市)
 来場者:37,000人(全体延べ人数)
 内 容:①親子でにぎにぎおにぎりコンテスト
 ②こめこめクイズ(ステージアトラクション)
 ③お米に関するクイズ



■平成21年度

1 奈良県「食と農のフェスティバル」(ごはんを食べよう国民運動奈良大会)

日 時:平成21年10月31日・11月1日

場 所:奈良県立橿原公苑(橿原市)

来場者:52,000人(全体延べ人数)

内 容:①「親子お米と米粉の料理教室」の実施
②「ごはん・お米とわたし」図画コンクールの表示
③お米に関するクイズ



2 福井県「お米フェスティバル」(ごはんを食べよう国民運動福井大会)

日 時:平成22年3月21日

場 所:道の駅さかい(坂井市)

来場者:3,000人(全体延べ人数)

内 容:①県産米を使った世界の米料理試食
②食育落語や子どもたちによる農作業体験発表等
③お米に関するクイズ



■平成22年度

1 栃木県「とちぎ“食と農”ふれあい2010」(ごはんを食べよう国民運動栃木大会)

日 時:平成22年10月23日・24日

場 所:栃木県庁・周辺施設(宇都宮市)

来場者:110,000人(全体延べ人数)

内 容:①ふるさととちぎ農業・農村児童画コンクール等
②お米を使った郷土料理や米粉パンの紹介、試食、県産米(米粉)を使用した料理体験コーナー
③脱穀・精米体験



2 滋賀県「第18回JALレーク大津農業まつり」(ごはんを食べよう国民運動滋賀大会)

日 時:平成22年11月27日

場 所:大津びわこ競輪場(大津市)

来場者:10,000人(全体延べ人数)

内 容:①かまど炊き近江米の試食
②米俵・かまどの展示
③お米に関するクイズ



1 ごはんを食べよう国民運動の「シンボルマーク」「キャッチフレーズ」「おむすびの日」の募集・制定

ごはんを食べよう国民運動の趣旨がイメージでき、親しみが持てる「シンボルマーク」と、運動の推進にふさわしい「キャッチフレーズ」(20文字以内)、“お米だけでなく、心も結ぶおむすび”にふさわしい日付「おむすびの日」を平成12年に公募し、審査のうえ決定した。(平成12年12月26日に記念日登録)

シンボルマークは親しみやすく人気があり、毎年使用したいという問い合わせがある。キャッチフレーズは当協議会発行の小冊子やグッズの中で活用し、運動の趣旨を訴求することに役立っている。

国民運動の原点である“阪神・淡路大震災の記憶と人々の善意への感謝の気持ち”を後世に伝えるものとして、「1月17日はおむすびの日」と制定して以降、毎年「おむすびの日」記念アンケートの実施、会員による「おむすびの日」普及啓発イベントの開催という形で定着していき、国民運動の主要な活動となっていった。

1月17日を中心にその前後の期間に、全国各地で活発に開催される啓発活動の様子は、地元新聞や全国紙でも頻繁に取り上げられ、多くの人に浸透していき、ごはんを食べよう国民運動を広める大きな役割を果たした。

□募集期間	平成12年7月18日～9月14日	□審査員(敬称略)	
□応募点数	シンボルマーク部門 684点	天野 祐吉	木村 尚三郎
	キャッチフレーズ部門 4,422点	永田 萌	今井 通子
	おむすびの日部門 2,661点	黛 まどか	中村 靖彦
	合 計 7,767点		

(敬称略・肩書きは当時のもの)

(1)「シンボルマーク」部門

最優秀作品

入賞者:松岡 英男(グラフィックデザイナー)



(2)「キャッチフレーズ」部門

最優秀賞作品 なし

優秀作品 「ごはんが好きな あなたが好き!」 入賞者:本間 滋之(無職)

// 「今日ごはんに会いましたか?」 入賞者:松本 聡(公務員)

// 「ごはん列島、おかわり自由。」 入賞者:矢野 雅也(出版・マスコミ)

(3)「おむすびの日」部門

• 最優秀作品 「1月17日」 入賞者:森澤 多美子(無職)

理 由:阪神・淡路大震災の日。とくにボランティアによる炊き出し(おむすび)は、本当に人々を助けてました。いつまでもこの善意を忘れないため。



- 優秀作品 「6月6日」 入賞者:藤田 智子(主婦)
理 由:むすんでむすんでおむすびよ
- 優秀作品 「10月10日」 入賞者:西塚 なおみ(主婦)
理 由:お皿に乗ったおむすびを連想しました。また、10月10日は、1年で1番晴れる日が多いということなので、運動に遠足に外へおむすびを持って出かける日にしたいと思いました。

2 「おむすびの日」記念アンケートの実施(平成12年～29年度)

「おむすびの日」を記念して、インターネット、携帯サイト等を活用し、抽選で当選者におこめ券をプレゼントする「おむすびの日」記念アンケートを毎年実施した。(全18回、計464,851名から応募)

アンケートにはたくさんの人から応募をいただき、その結果はメディアでも頻繁に取り上げられるなど、多くの人が「おむすび」に関心を寄せるきっかけとなった。

【アンケート結果】(メディアで掲載されたものから一部抜粋)

(1)「おむすびの具として好きなもの」をこれまで8回調査した。

第1回目(平成12年度)と8回目(平成26年度)を比較すると、ベスト3は1回目が「梅干」18.3%、「鮭」17.4%、「鰹節(おかか)」10.2%で、8回目は「鮭」27.5%、「梅」16.1%、「明太子」14.9%であった。

第1回目ではすべての年代で1位が「梅干」、2位が「鮭」。8回目では、全ての年代で「鮭」が1位であったが、2位は10～20代の若い世代で「ツナ」、30代で「明太子」、40代以上で「梅」であった。(P62に関連記載あり)

(2)「おむすびが似合う有名人」を2回調査した。

1回目(平成19年度)は、1位が「山下 清」8.7%。2位は「石塚 英彦」6.8%、3位が「香取 慎吾」であった。2回目(平成21年度)は、1位「石塚 英彦」4.3%、2位「福山 雅治」4.2%、3位「ベッキー」3.3%、4位「香取 慎吾」2.2%であった。

(3)平成23年度(第12回)調査の「おむすびの似合うスポーツ選手」では、1位は東北楽天ゴールデンイーグルスの「田中 将大」13.9%、2位はシアトルマリナーズの「イチロー」8.1%、3位は女子サッカーなでしこジャパンの「澤 穂希」7.8%であった。

区分	応募期間	応募者数	区分	応募期間	応募者数
第1回	平成12年12月28日～ 平成13年3月17日	7,089	第6回	平成18年1月13日～ 平成18年2月28日	11,764
第2回	平成13年12月1日～ 平成14年1月31日	113,000	第7回	平成18年12月27日～ 平成19年2月28日	10,295
第3回	平成14年12月3日～ 平成15年1月31日	57,311	第8回	平成20年1月4日～ 平成20年2月29日	19,399
第4回	平成15年12月14日～ 平成16年2月15日	68,604	第9回	平成20年12月26日～ 平成21年2月28日	30,318
第5回	平成16年12月17日～ 平成17年2月13日	29,680	第10回	平成22年1月4日～ 平成22年2月28日	9,070

区分	応募期間	応募者数	区分	応募期間	応募者数
第11回	平成23年1月4日～ 平成23年2月28日	11,686	第15回	平成27年1月7日～ 平成27年2月28日	15,482
第12回	平成24年1月17日～ 平成24年2月28日	12,307	第16回	平成28年1月6日～ 平成28年2月29日	16,685
第13回	平成25年1月4日～ 平成25年2月28日	22,913	第17回	平成29年1月5日～ 平成29年1月31日	7,884
第14回	平成26年1月7日～ 平成26年2月28日	14,218	第18回	平成30年1月4日～ 平成30年1月31日	7,146

3 会員との共催(平成12年度～29年度)

協議会会員が主体となって、1月17日を中心に、JA全中お米ギャラリーや、全国各地でお米に関する多彩なPRイベント・キャンペーンを実施し「1月17日はおむすびの日」の普及・啓発を行った。各地でのイベントはメディアでも多く取り上げられ、国民に身近な「おむすび」を通して、一般の方々に広く国民運動の趣旨を普及することにつながった。

JA全中(全国農業協同組合中央会)お米ギャラリー・ごはんミュージアムとの共催イベントの実施ヶ所

12年度	3ヶ所	16年度	4ヶ所	19年度	2ヶ所
13年度	3ヶ所	17年度	4ヶ所	20年度	1ヶ所
14年度	4ヶ所	18年度	2ヶ所	21年度	1ヶ所
15年度	4ヶ所				

会員との共催イベントの実施ヶ所数

12年度	1ヶ所	18年度	12ヶ所	24年度	18ヶ所
13年度	9ヶ所	19年度	12ヶ所	25年度	19ヶ所
14年度	16ヶ所	20年度	12ヶ所	26年度	19ヶ所
15年度	21ヶ所	21年度	16ヶ所	27年度	18ヶ所
16年度	25ヶ所	22年度	19ヶ所	28年度	19ヶ所
17年度	23ヶ所	23年度	10ヶ所	29年度	4ヶ所

掲載メディア(順不同)

【新聞】49社143回

読売新聞、朝日新聞、毎日新聞、産経新聞、日本経済新聞、米穀新聞、日本農業新聞、全国農業新聞、商経アドバイス、米麦日報、農林経済、北海道新聞、岩手日日新聞、胆江日日新聞、秋田魁新報、山形新聞、荘内日報、福島民報、福島民友新聞、茨城新聞、新しいばらき新聞、上毛新聞、埼玉新聞、東京新聞、東京スポーツ、北國新聞、福井新聞、日刊県民福井、中日新聞、神戸新聞、日本海新聞、山陰中央新報、山陽新聞、岡山日日新聞、中国新聞、山口新聞、サンデー山口、徳島新聞、四国新聞、愛媛新聞、西日本新聞、長崎新聞、佐賀新聞、熊本日日新聞、大分合同新聞、南日本新聞、鹿児島新報、シティリビング、聖教新聞

【テレビ】14放送局15回

NHK、NHK教育、サンテレビ、OHK岡山放送、KSB瀬戸内海放送、テレビ山口、山陽放送、NHK松江放送局、RKB毎日放送、TVQ九州放送、テレビ熊本、熊本県民テレビ、熊本朝日放送、熊本放送



4 おむすびにまつわる絵てがみメッセージの募集(平成16年度)

阪神・淡路大震災から10年が経過し、ボランティアへの感謝、食料や危機管理の大切さ等をあらためて見直すきっかけとするため、災害時や戦後の食料難などの時に食べた、“人と人とを結ぶ”おむすびへの想い等を全国各地から被災地へ、また被災地から全国に向けたところのメッセージを「絵てがみ」として募集した。募集期間は、平成16年12月17日～平成17年2月13日、応募作品数は592点、この中から優秀賞10点、佳作50点が選ばれた。(P45に入賞作品を掲載)

会員による「おむすびの日」普及・啓発イベント



おむすび教室(北海道)



おいしいおにぎりを作ってみよう(宮城県)



おむすびのふるまい(福井県)



米食品フェアin OKAYAMA(岡山県)

論 説

おむすびの日

助け合い 考える契機に

1月17日は「おむすびの日」。1995年のきょう、阪神・淡路大震災が発生した後、ボランティアがおむすびを炊き出しし、被災者が励まされたことに由来する。助け合いの大切さを考えるきっかけしよう。

「おむすびの日」は、官民や有識者でつくる「ごはんを食べよう国民運動推進協議会」が、この大震災での体験を機に「ごはんを食べよう国民運動」に取り組み、食料、特に米の重要性とボランティアの善意を広める活動をしている。阪神・淡路大震災発生後の大

混乱の中、炊き出しに駆け付け、地域の農家やJ A女性部員だった。自家用の米で作ったおむすびを被災者に届けた。ボランティアとして被災地に赴き、助け合いの大切さを再認識されたのは、この大災害である。東日本大震災が発生した時も熊本地震の時も、同じように女性部員らが「おむすび」を作り被災者に寄り添った。逆に、支援した人たちが思わぬ災害で被災した時に、支援された人たちが駆け付け、励ます動きもあった。まさに「情けは人のためならず」である。

文化庁の「国語に関する世論調査」(2010年)で、興味深い結果がある。このことわざを「人に情けをかける」と巡り巡って自分のためになる」という本来の意味で捉えていた人は46%。「人に情けをかけて助けてやる」とは、結局はその人のためにならない」と捉えていた人とはほぼ同数だった。

間違った認識の広がりには、市場原理優先の経済理論のような考え方が社会全体に広がっていることへの懸念である。「おむすびの日」を、本来の意味を確認し、「結び」の大切さを再認

「同じご飯なのに、おむすびの方がおいしい」といわれるのは、手で握るからこそ、人とのつながりを感じやすいからである。手軽に持ち運べるので、運動会や遠足といった楽しい思い出ある日はつく心細い時に食べ、でもほんとした思い出に結び付きやすい。

さらに言えば、おむすびは日本独特の粘り気がある米粒と米粒が結びついて出来る。外国産の米のようにパラパラした米では結び付かない。

いまは、毎日のように記念日がある。その中で、「おむすびの日」は結ぶ、縁というものを大切にすることを大切にしたい。若い人にほど伝えたい、かけがえない日である。

日本農業新聞(H30.1.17)

III 「1.17 おむすびの日」が全国に浸透

22

農林水産省において、ごはんを中心とする日本型食生活の全国的な普及促進を図るために、全国1ヶ所のモデル地域(市・区～都道府県域のエリア)において、民間事業者(広告代理店、イベント会社等)が自由な発想により企画した事業を集中的に行う「にっぽん食育推進事業」が平成18年度に創設され、ごはんを食べよう国民運動推進協議会が事業主体となり実施した。

当協議会が事業主体に選ばれたのは、①全都道府県が加入していること、②米関係で生産・流通・消費の各団体・企業が加入した唯一の全国組織であること、③公的機関(県庁)が事務局を担っていること、そして何よりも協議会設立以来ごはんを中心とした日本型食生活の推進に意欲的に取り組んできたことが評価されたものと受け止めている。

【事業のあらまし】

当協議会が事業主体となり、農林水産省と連携しモデル事業の公募・選考を行う。

企画を採択された民間事業者は、その内容により地域の自治体や企業、団体等と連携して事業を実施する。

〈民間事業者に提案を求める内容〉

提案された企画は、検討委員会(外部有識者)で審査・選考

①事業のコンセプト(求める成果等)

事業実施期間は3年で、成果イメージも民間事業者に自由に提案してもらう。

②実施地域(全国1カ所:市・区～都道府県域のエリア)

③事業内容

1 企画提案競技の実施

〈経緯〉 6月13日 公募開始(～7月4日(22日間))

6月22日 説明会の開催(東京都内)

7月4日 公募締め切り(全国から16提案の応募)

16提案の実施地域の内訳:北は宮城県仙台市から南は広島県まで、11都府県(東北、関東、信越、中部、関西、中国地方)。全国規模で提案が出された。

8月3日 書面審査結果を決定(書面審査により、プレゼンテーション審査に進む6提案を選定)

8月19日 プレゼンテーション審査会を開催(東京都内)

採択:(株)神戸新聞社の企画提案 「新ライススタイル」～ごはんを新しい食として提案～



日本経済新聞(H18.6.6)



2 事業の展開(平成18年度～20年度)

(1)実施地域 神戸を中心とした兵庫県瀬戸内沿岸

(2)実施内容

①事業コンセプトの提示 「新ライススタイル～ここらにおいしいごはん」

②事業推進キャラクターの設定

藤原紀香さん(女優)、平尾誠二さん(神戸製鋼ラグビー部監督)、

藤川球児さん(阪神タイガース投手)、ヴィッセル神戸(チーム肖像の活用)

③Webによる情報発信 ごはんの学校「ゴーゴーご組」の開設・運営

(3)主な事業の実施状況

区分	18年度	19年度	20年度
主な内容	【藤原紀香さん起用の広告展開】 ^(注)		
	【ごはんカンパニー活動】 (74社参加)	(104社参加)	(124社参加)
	【食のイベント】(32,000人)	【ごはんのまつり】(16,500人)	【ごはんのまつり】(12,000人)
	【大規模食実態調査】 (約9,500人対象)	【効果測定調査】 (約450人対象)	【効果測定調査】 (約450人対象)
		【保田先生のごはん塾】 (12回延べ2,172名参加)	(18回延べ2,684名参加)
		【Webサイトのごはんの学校 「ゴーゴーご組」の設置】 (会員2,513名)	(会員3,284名)
補助金額	292,349千円	329,076千円	57,000千円

(注)・平成20年度は、国の事業再編により、広告・宣伝費用(新聞・ラジオ・交通広告等)を減じて実施。

・結婚で話題を呼んだ女優の藤原紀香さんを起用した一連の広告展開は、企画性が評価され、日本新聞協会の新聞広告賞2007を受賞した。

(4)成果

普及啓発の展開により、ごはんの消費量が1週間で1人1杯増。

効果測定調査結果(県内の地域人口比率を考慮し市町単位で無作為抽出した県民約450人対象の調査)

指標	目標(対前年比)	成果(H19.9とH20.12の比較)
1人1週間当りごはん食回数	105%	110% (11.3回 → 12.4回)
1人1食当りごはん量	105%	99% (179g → 177g) ^(注)
ごはん消費量	110%	109% (12.6杯 → 13.7杯)

(注)お茶碗1杯160gで計算。

◆「ごはんカンパニー」活動

- ごはんを中心とした日本型食生活を実践・推進する企業・団体・学校のネットワークとして「ごはんカンパニー」を結成(平成19年2月19日 決起大会)。
- 構成員数:74社(H18) 104社(H19)
124社(H20)
- 活動内容:社内啓発、ポイント還元グッズの提供、食育セミナー、料理教室、協働販促事業、イベントへのボランティア派遣 等



◆食イベント「ごはんのまつり」

- 「ごはん」をキーワードにごはんカンパニー等と消費者が集う大規模食イベント(2日間)を、神戸ファッションマートで開催。食に関する「ごはんカンパニー」が多数出展した。
- 来場者数:16,500人(H19) 12,000人(H20)
- 出展数:55ブース(H19) 35ブース(H20)
- その他、兵庫県民農林漁業祭等のイベントに出展・PR



◆「保田先生のごはん塾」

- 地域活動として、「子どもたちのかまど炊飯体験」と「保護者への学識経験者の講義」を組み合わせた食育活動を幼稚園、小学校等で実施。
- 受講前後のアンケートで『朝食にごはんを食べる人』が大幅に増加。
- 感動と納得に基づく体験型食育活動のモデルを構築。



• 実施状況	(H19) 12か所、参加者2,172人(児童等1,587人、保護者等585人)		
	(H20) 18か所、参加者2,684人(児童等1,445人、保護者等1,239人)		
• 成果(平成20年度受講者対象の調査より)			
	(受講時)		(受講後1ヶ月)
朝食で週4回以上ごはんを食べる人の割合	36.7%	→	50.5%(13.8ポイント増加)
朝食にごはんを食べない人の割合	38.8%	→	19.9%(18.9ポイント減少)



◆ Webサイト「ゴーゴー組」

- インターネット上に「ごはんの学校」を開設し (H19.9)、授業形式でのごはんを中心とした情報の発信、「ごはん検定」の実施、地域活動情報の発信。
- 受講等に対しポイントを付与し、協賛企業等提供の商品をポイント還元する仕組みにより、向学心を刺激。
- 子育て世代(20代~40代)の会員が全体の80%以上を占め、ごはん食推進の取り組みに重要な世代への啓発ツールとして機能。



ゴーゴー組とは

神戸大学名誉教授の保田茂さんが校長に、女優の藤原紀香さんが初代の学級担任に、そして各方面の専門家の先生方が参加し、生徒である会員と双方向で、お米やごはんについて一緒に勉強しようというこれまでにないシステム。

- **会員数** 3,284人 [H21.3.4現在]
- **アクセス状況** 月間 1,067,273PV* [H21.1]
(参考:兵庫県HP 約515,000PV [H20.12]) ※PV(ページビュー):ページ閲覧回数
- **授業の配信** 作成授業数:135本(H19:89本、H20:52本)
授業1本と練習問題3問を日替わりで毎日配信
- **講師陣(敬称略)**
(校長・社会科) 保田 茂(神戸大学名誉教授)
(担任) 上田 千華(タレント)(H19は藤原紀香)
(調理実習) 白井 操(料理研究家)
(保健体育) 鈴木 正成(早稲田大学スポーツ科学学術院教授)
(家庭科) 竹内 富貴子(管理栄養士、ダイエットクリエイター)
(理科) 伏木 亨(京都大学大学院農学研究科教授)
(保健体育) 森谷 敏夫(京都大学大学院人間環境学研究科教授)
(部活顧問) 平尾 誠二(神戸製鋼ラグビー部GM兼総監督)
- **ごはん検定** 年3回実施、50問出題 受験者数:1,150人(H19) 2,179人(H20)
- **話題性喚起** 神戸製鋼ラグビー部、宝塚歌劇団、灘中・灘高とタイアップし、ごはんとスポーツ、美、学力の関係を情報発信

◆ 主要事業の継続

にっぽん食育推進事業での成果を踏まえ、Web上のごはんの学校「ゴーゴー組」(www.gokumi.com)と、かまどを使った「保田先生のごはん塾」については、大変好評で引き続き成果が見込まれることから、一部内容を縮小して、兵庫県の「おいしいごはんを食べよう県民運動」の中で、独自に継続・展開している。

なお、「保田先生のごはん塾」は、平成29年度は幼稚園(保育園)・小学校において延べ2,268人(保護者を含む)が体験。平成30年度は幼稚園(保育園)だけでも実施予定園数15園に対して、135園から申込み(申込み倍率9倍)があった。今後決定する小学校分を含めると、前年度を上回る体験参加者が見込まれている。

(参考)新たな国民運動「FOOD ACTION NIPPON」(フード・アクション・ニッポン)へ

平成20年10月からは、農林水産省が中心となって国産農林水産物の消費拡大に向けた国民運動「FOOD ACTION NIPPON」(フード・アクション・ニッポン)が立ち上がり、推進パートナーとして民間企業等の参画が図られており、当協議会も一員である。

フード・アクション・ニッポン

日本の食を次の世代に残し、創るために、民間企業・団体・行政・消費者等が一体となって推進する国産農林水産物の消費拡大の取り組みで、平成20年10月の立ち上げ以来、平成30年度で10周年を迎え、「推進パートナー」(活動主旨に賛同し登録した企業・団体等)は10,192社(※平成30年3月31日現在)に至っている。

ごはんの学校ゴーゴ組の活動

- 平成19年 7月 ゴーゴ組予告サイト設置
 9月 ゴーゴ組開校
 (校長:神戸大学名誉教授 保田茂さん 担任:藤原紀香さん)
 神戸製鋼ラグビー部プロジェクト
 (強い体を作るためのスポーツ用菓子試作品の試食会)
- 10月 保田先生のごはん塾スタート(明石市を皮切りに18回実施)
 平成19年度第1回ごはん検定
- 11月 平成19年度第2回ごはん検定
 平成19年度兵庫県民農林漁業祭ゴーゴ組サテライト教室出展
 (ゴーゴ組PRと生徒募集)
- 12月 体験!綱引き教室(加古川市内ごはん食啓発)
 宝塚歌劇団プロジェクト(柚木礼音さん、北翔海莉さんインタビュー)
 白井操先生の料理教室スタート(計15回実施)
- 平成20年 1月 神戸製鋼ラグビー部プロジェクト
 (神戸製鋼 VS トヨタ自動車戦でゴーゴ組かまど隊によるごはん食啓発)
 (アフターマッチファンクションでのごはん食啓発)
 灘中学校・灘高等学校プロジェクト(保田先生のごはん塾を灘高等学校で実施)
- 2月 平成19年度第3回ごはん検定
 おかわり力アッププロジェクト
 (加古川カップ綱引き記念大会に参加、一般チャレンジ部門で優勝)
- 3月 第1回ごはんのまつり(神戸六甲ファッションマート)
 平成19年度かまどごはん体験キャラバン 10,000人達成
 ごはんカンパニーによるごはん普及イベント
 (イオンモール伊丹テラス内ジャスコ伊丹店)
- 4月 ゴーゴ組新担任 平尾誠二さん就任(~7月)
- 6月 平成20年度兵庫県楽農生活センター 親子農業体験スタート
- 8月 ゴーゴ組新担任 上田千華さん就任
 米飯学校給食5回実施市町長インタビュー
 (小野市、宍粟市、佐用町、篠山市にご組感謝状を贈呈)
- 9月 おかわり力アッププロジェクト
 (レッドスターベースボールクラブで早稲田大学教授鈴木正成さんが講義)
 宝塚歌劇団プロジェクト(音月桂さんインタビュー)
 平成20年度第1回ごはん検定
- 10月 食事バランスガイド料理教室
- 11月 宝塚歌劇団プロジェクト(遼河はるひさん、城咲あいさんインタビュー)
 ごはんを食べよう国民運動推進協議会鳳蘭理事インタビュー
 平成20年度兵庫県民農林漁業祭にゴーゴ組サテライト教室出展
 (ごはん食啓発と生徒募集)
 平成20年度第2回ごはん検定
- 12月 宝塚歌劇団プロジェクト(愛音羽麗さん、野々すみ花さんインタビュー)
 おかわり力アッププロジェクト
 (レッドスターベースボールクラブスカイマークスタジアムでごはん食啓発)
- 平成21年 1月 神戸製鋼ラグビー部プロジェクト(ホームズスタジアムでごはん食啓発)
 平成20年度第3回ごはん検定
 第2回ごはんのまつり(神戸六甲ファッションマート)
 平成20年度かまどごはん体験キャラバン 10,000人達成



IV
「にっぽん食育推進
事業」の実施





広報・情報発信～多くの方に国民運動を知ってもらう～

1 ごはんを食べよう国民運動推進協議会ホームページの開設・運営(平成12年度～)

協議会のホームページを開設し、国民運動に関する情報を広く提供するとともに、ホームページを活用し「おむすびの日」記念アンケートを実施するなど、多様なコンテンツで情報を発信し、ごはんを中心とした日本型食生活の普及啓発を行った。

ホームページ開設後は短期間でアクセス数が増加し、毎年度安定して20万件以上のアクセスを記録するなど、ごはんを食べよう国民運動を知る主要な情報ツールとして多くの人に利用された。

(1)開設日 平成12年10月18日

(2)ホームページ閲覧数

平成12年度	12,649件	平成18年度	285,485件	平成24年度	242,166件
平成13年度	83,926件	平成19年度	262,727件	平成25年度	225,844件
平成14年度	139,623件	平成20年度	245,383件	平成26年度	239,187件
平成15年度	225,358件	平成21年度	302,620件	平成27年度	215,529件
平成16年度	184,786件	平成22年度	225,901件	平成28年度	209,568件
平成17年度	205,834件	平成23年度	220,528件	平成29年度	234,685件

2 取材協力

全国の放送・出版等のメディアから取材協力の依頼があり、積極的に協力した。その際、人々の記憶や記録に残るよう、取材協力者として、当協議会の名称を紹介することを要請した。結果として、これら取材協力の実績は国民運動の成果の一つとなった。

平成17年度

	発行元・出版物名	協力内容
1	NHKラジオ第1放送 平成17年10月10日	「ラジオほっとタイム」の特集「おにぎり」に保田茂さん(神戸大学名誉教授)が出演。収録の協力を行った。
2	角川春樹事務所「月刊ランティエ」 2005年12月号	「大特集/日本の食遺産全国津々浦々・お国自慢『寿司』」に当協議会発行の小冊子「ふるさとのすし」から写真提供
3	シャデイサラダ館 「小京都を訪ねて」2006	地元再発見「北海道編」「東北編」「関東編」「北信越編」「中部編」「近畿編」「中国編」「四国編」のご当地メニューに小冊子「ふるさとのすし」のレシピ・写真提供
4	グリーンチャンネル・アグリネット 2006年1月23日放送	番組:美味しいズム「おにぎり大好き!」に2005年おむすびの日記念アンケート結果(あなたの好きな具はなんですか?)を提供
5	日本放送出版協会「食彩浪漫」 2006年4月号	記事「あるある全国ご当地ふるさと丼」で当協議会発行の小冊子「ふるさとのどんぶり」の情報を取材協力

平成18年度

	放送局・発行元・出版物名	協力内容
1	(株)ポプラ社「世界の料理」 2007年3月発行	学習図書ポプラディア情報館「世界の料理」へ当協議会発行の小冊子「世界のくらしと米」の記事・写真提供
2	TBS「はなまるマーケット」 平成18年7月13日	平成16年度の四季ごとの朝ごはんレシピ最優秀作品の紹介
3	(株)ポプラ社 月刊ポプラディア 2007年5月号	小学生向け学習サポート誌 月刊ポプラディア5月号の特集「世界の米」での記事・写真提供

	放送局・発行元・出版物名	協力内容
4	Kiss-FM KOBE (受信エリア:兵庫県、大阪府の一部) 平成19年2月5日	朝の情報番組「Brand New Kobe」の「ごはんの魅力」特集で保田茂さん(神戸大学名誉教授)が出演。収録の協力を行った。

平成19年度

	放送局・発行元・出版物名	協力内容
1	NHK総合TV「ためしてガッテン」 (2007年5月16日放送)	おにぎり特集の番組内で、1月17日「おむすびの日」の由来について紹介された。編集の協力を行った。
2	(財)日本消費者協会「月刊消費者」 2007年9月号	「とくとく情報館」 出版物紹介で当協議会監修のムック本「ごはんが食べたい。」を紹介
3	毎日新聞「毎日夫人」 2007年10月号	特集「おにぎり」の「古今東西ふるさとのおにぎり自慢」で当協議会発行の小冊子「ふるさとのおむすび」の写真2点を提供した。
4	大和ハウス工業(株) 「オーナーズマガジン」11・12月号 (20,000部発行)	特集「ふるさとのおにぎり100選」に小冊子「ふるさとのおむすび」の写真2点を提供した。
5	朝日新聞マリオン首都圏版 2007年9月18日夕刊	「be evening」欄の「おにぎり」特集記事で当協議会のコメントが掲載。2004年おむすびの日アンケート結果がグラフで紹介された。記事の編集の協力を行った。
6	NHK総合「日本の、これから」(2007年 10月20日放送)のアンケート協力	「食」をテーマにした同放送番組の制作にあたり、NHKからの協力要請に応じ、番組構成のためのアンケートへの協力を会員に周知した。
7	(社)日本広報協会「月刊広報」 2007年11月号(1万部)	自治体や各種団体の広報担当者向けの月刊「広報」の「今月の記念日」の欄に、「おむすびの日」が紹介された。記事の編集の協力を行った。
8	日本米穀小売商業組合連合会「お米マイ スターのおむすびパワー教室」募集チラ シ2008年1～2月 兵庫県内で配布	日本米穀小売商業組合連合会と兵庫県米穀小売商業組合が兵庫県内で実施する「お米マイスターのおむすびパワー教室(小学校への出前授業)」募集チラシに「おむすびの日」が紹介され、原稿作成の協力を行った。
9	朝日生命月刊あさひホットメール 2008年1月号 顧客向けリーフレット20万枚	朝日生命の顧客向けリーフレットで「おむすびの日」が紹介され、記事の編集の協力を行った。
10	JAみはま(若狭美浜町農業協同組合) 2008年正月番組、JA広報誌1月号～	地元ケーブルテレビ正月番組で、国民運動ホームページの内容を活用したミニ番組を制作した際の編集協力を行った。JA広報誌1月号から当協議会発行の小冊子「食育ドリル」を活用した記事を設けた。
11	OBS大分放送ラジオ「ごごらくラジオ」 2008年1月16日16:10～16:15 生放送の電話取材に出演	OBSラジオ「ごごらくワイド」の「明日は何の日」のコーナーに電話出演し「1月17日おむすびの日」の紹介を行った。
12	フジテレビ「あっぱれさんま新教授」 2008年2月17日放送(首都圏)	ゲストの出身地のおむすびを提供するコーナーで、データ提供を行うと共に、滋賀県出身のゲスト用に「鉄砲うめおむすび」(甲賀地方)の編集協力(具材アドバイス・手配)を行った。

平成20年度

	放送局・発行元・出版物等	協力内容
1	(株)ポプラ社「ポプラディア郷土料理」	小中学生向け・学校図書館向け冊子「ポプラディア情報館 郷土料理」の発行に向け、掲載情報及び写真を提供
2	とちぎ子どもの食育ライブラリー	子どもの食育を推進するため、食育関係資料を整備した施設に、当協議会作成の「ごはんを食べよう紙芝居」を提供
3	日本経済新聞社「日経プラス1」 (平成20年11月15日)	おすすめの郷土おにぎりランキング特集記事に小冊子「ふるさとのおむすび」掲載情報を提供



3 ごはん食キャンペーンの展開(平成14年度～16年度)

(1)「ごはんがすすむ我が家自慢のこの一品&ショートエッセイ」の募集、PR

募集内容:ごはんがすすむ我が家自慢のこの一品のレシピ(写真又はイラスト付き)と料理にこめられた思い出やこだわりの理由のショートエッセイ

募集期間:平成14年11月～平成15年2月

応募数:984点(応募者全員に小冊子「ふるさとのすし」を送付)

特別賞:100点(特別賞受賞者におこめ券5,000円分を送付)

活用:特別賞作品をホームページで紹介
特別賞作品を集めたレシピ集を1,000部作成、配布

(2)四季ごとにごはんと組み合わせた朝ごはん献立の募集・紹介

季節の旬の食材を使った、その季節に食べたい朝ごはん献立を季節ごとに締切を設け、「小中学生の部」と「一般の部」に分けて募集。全応募作品の中から審査員(ケンタロウさん)が選出した優秀賞受賞作品各10点をホームページに掲載し、閲覧者に投票してもらい、季節ごとの最優秀賞(ベストワン賞)を決定。

【最優秀賞作品】

区分	小中学生の部	一般の部
	献立名	献立名
秋	ごはん、きのこみそ汁、トロトロたまご焼き、サラダ	いくらの醤油漬丼、鮭の塩焼、三平汁
冬	菜っ葉チャーハンと大根の味噌汁	クラムチャウダー風おかゆ・キャベツのごまあえ
春	春の元気もりもりごはん	その季節に食べたい朝ごはん!
夏	黄身ネバ納豆丼	夏のひんやりごはん

【募集結果】

区分	募集期間	応募数	
		小中学生の部	一般の部
秋	平成15年9月1日～平成15年11月30日	30	121
冬	平成15年12月1日～平成16年2月29日	278	115
春	平成16年3月1日～平成16年5月31日	85	253
夏	平成16年6月1日～平成16年8月31日	99	142
合計		492	631

(3)親子で学ぶ食育実践資料「ごはんを食べよう」紙芝居の作成

紙芝居形式の食育実践資料「朝ごはん食べた? みんなの金メダラー」を350部作成し、協議会会員等に配布した。主に幼稚園、保育園、小学校での食育の場で活用された。



4 啓発冊子の作成・配布(平成13年度～)

啓発冊子を作成し、当協議会の会員を通じて、配布を行った。「ふるさとのおむすび」をはじめとした郷土色豊かな冊子や子どもと大人が一緒に楽しむドリルは、多くの人が国民運動に触れるきっかけとなった。

■ ふるさとのおむすび

会員から推薦のあった47都道府県のふるさと自慢のおむすびを集めた小冊子



■ ふるさとのすし

会員から推薦のあった47都道府県の郷土色豊かなすしを集めた小冊子



■ ふるさとのどんぶり

会員から推薦のあった47都道府県の郷土色豊かな丼を集めた小冊子



■ 食育実践資料「世界のくらしと米」

世界各国の米文化、稲作方法、米料理などをとりあげた小冊子



■ 食育実践資料「食育ドリル」

バランスのとれた「ごはんを中心とした日本型食生活」に近づくために、大人と子どもが一緒になって楽しく食について学ぶことができるドリル



5 農林水産祭「実りのフェスティバル」での出展(平成23年度～28年度)

全国イベントである「実りのフェスティバル」において、ごはんを食べよう国民運動推進協議会のPRやごはん食を中心とした日本型食生活の普及啓発等を行った。

平成23年度 第50回農林水産祭「実りのフェスティバル」

日 時 平成23年11月4日10:30～17:00、5日10:00～17:00
場 所 東京ビッグサイト西3ホール(東京都江東区有明3-11-1)
来場者 46,000人(全体延べ人数)

平成24年度 第51回農林水産祭「実りのフェスティバル」

日 時 平成24年11月10日10:00～16:00、11日10:00～16:00
場 所 日比谷公園(東京都千代田区)
来場者 64,000人(全体延べ人数)

平成25年度 第52回農林水産祭「実りのフェスティバル」

日 時 平成25年11月8日10:00～16:00、9日10:00～16:00
場 所 明治公園・霞岳(東京都新宿区)
来場者 31,000人(全体延べ人数)

平成26年度 第53回農林水産祭「実りのフェスティバル」

日 時 平成26年10月31日10:00～16:00、11月1日10:00～16:00
場 所 サンシャインシティ・ワールドインポートマートビル(東京都豊島区)
来場者 41,000人(全体延べ人数)

平成27年度 第54回農林水産祭「実りのフェスティバル」

本年は秋篠宮殿下、同妃殿下がご視察され、林会長から当協議会の概要を説明した。

日 時 平成27年11月13日10:00～17:00、14日10:00～16:00
場 所 サンシャインシティ・ワールドインポートマートビル(東京都豊島区)
来場者 51,000人(全体延べ人数)



平成28年度 第55回農林水産祭「実りのフェスティバル」

日 時 平成28年11月11日10:00~17:00、12日10:00~16:00

場 所 サンシャインシティ・ワールドインポートマートビル(東京都豊島区)

来場者 47,000人(全体延べ人数)

6 ごはんを食べよう国民運動グッズの作成・配布

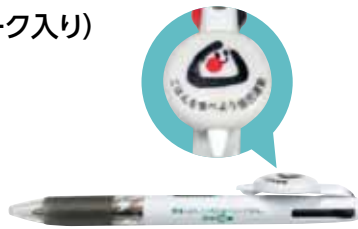
国民運動大会の参加者、おむすびの日普及啓発イベントの参加者などにごはんを食べよう国民運動グッズを配布し、PR活動を行った。国民運動のシンボルマークは親しみやすく人気があり、毎年使用したいという問い合わせがある。

過去に作成したグッズ一覧(国民運動シンボルマーク入り)

- しゃもじ
- おむすびケース
- ボールペン
- ストラップ
- 巾着
- 歯ブラシ
- 菜箸
- クリアフォルダー
- マグネット
- シール
- 国民運動・ごはん食普及啓発パネル5枚組(B1版)
- 国民運動推進協議会のぼり 450mm×1500mm
- おむすびの日のぼり 450mm×1500mm
- 企業ロゴマーク等を記載したPRパネル



クリアフォルダー



ボールペン



ストラップ



シール



マグネット



のぼり



ごはんを食べよう国民運動PRパネル



主な活動の記録(平成11年度～29年度) ※敬称略

平成11年度

1 総会・幹事会

平成11年4月23日	設立総会(都道府県会館:東京都千代田区)
平成11年8月24日	第1回幹事会(八重洲富士屋ホテル:東京都中央区)
平成12年3月6日	第2回幹事会(八重洲富士屋ホテル:東京都中央区)

2 主な活動

(1)設立記念座談会

平成11年4月23日	都道府県会館(東京都千代田区)	203人
テーマ	「ごはんを食べよう国民運動への期待」	
出演者	木村 尚三郎(東京大学名誉教授、当協議会会長) 中村 靖彦(NHK解説委員、当協議会理事) 渡辺 文雄(俳優、当協議会理事)	

(2)活動研究発表会

平成11年11月19日	ホテルフランクス(千葉市)	227人
①基調講演	「家庭・地域から広げるとは食と健康の輪」	
講師	鈴木 正成(筑波大学教授)	
②活動研究発表	「和食普及研究会の活動」	
	和食普及研究会 事務局長	村田 祥
	「ごはんファミリーフェスタについて」	
	奈良県農林部農政課 食糧係長	藤村 秀也
	「生活習慣病予防のためのごはん食」	
	(社)日本栄養士会 常任理事・広報普及部長	仙賀 鈴江
③総括コメント	京都大学大学院教授、当協議会幹事長	嘉田 良平

平成12年度

1 総会・幹事会

平成12年6月2日	総会(ホテルニューオータニ:東京都千代田区)
平成12年7月25日	第1回幹事会(都道府県会館:東京都千代田区)
平成13年2月19日	第2回幹事会(都道府県会館:東京都千代田区)

2 主な活動

(1)全国大会

平成12年6月2日	ホテルニューオータニ(東京都千代田区)	400人
トークショー	「日本の豊かな食文化」	
出演者	ロザンナ(歌手)	
聞き手	千葉 真由美(キャスター)	

(2)シンポジウム

平成12年11月24日	イイノホール(東京都千代田区)	500人
①「シンボルマーク」「キャッチフレーズ」「おむすびの日」入賞作品の発表・表彰		
②基調講演	「私はごはんが大好きだ」	
講師	渡辺 文雄(俳優、当協議会理事)	
③パネルディスカッション	「食卓で考える日本の未来」	
コーディネーター	中村 靖彦(NHK解説委員、当協議会理事)	
パネリスト	木村 尚三郎(東京大学名誉教授、当協議会会長) 今井 通子(医師・登山家、当協議会副会長) 貝原 俊民(兵庫県知事、当協議会副会長) 家森 幸男(京都大学大学院教授) 星 寛治(農業・農民詩人)	

- ※NHK衛星第1テレビ「BSフォーラム」で放映
 (平成13年3月24日13:00～13:50、再放送3月26日10:00～10:50)
- (3)「シンボルマーク」「キャッチフレーズ」「おむすびの日」の募集・制定
- | | | | |
|------|------------------|--------|----------|
| 募集期間 | 平成12年7月18日～9月14日 | | |
| 応募点数 | シンボルマーク部門 | 684点 | |
| | キャッチフレーズ部門 | 4,422点 | |
| | おむすびの日部門 | 2,661点 | 合計7,767点 |
- (4)「おむすびの日」の普及啓発
- ・記念アンケートの実施(おこめ券プレゼント) 応募者数 7,089名
 - ・JA全中お米ギャラリーとの共催イベント(3か所)、会員との共催イベント(全国1か所)
- (5)ごはんを食べよう国民運動語りべ10万人作戦の展開
- ・パンフレット「ごはんを食べよう」の作成・配布
- (6)インターネットホームページの開設(平成12年10月18日)と情報発信
- 年間アクセス件数 12,649件
- (7)知事と語る食と農の県民会議の共催 4県(秋田、栃木、三重、滋賀)
- (8)お米カルチャー教室の共催 10県(青森、茨城、埼玉、神奈川、静岡、長野、富山、愛知、香川、福岡)
- (9)「食を考える国民会議」(会長:木村尚三郎東京大学名誉教授)への加入

平成13年度

1 総会・幹事会

- 平成13年5月18日 総会(クロスタワーホール:東京都渋谷区)
 平成13年9月14日 幹事会(都道府県会館:東京都千代田区)

2 主な活動

- (1)推進大会
- | | | |
|------------|-------------------|------|
| 平成13年5月18日 | クロスタワーホール(東京都渋谷区) | 290人 |
|------------|-------------------|------|
- ①活動発表 栃木県、(財)日本食生活協会
 ②特別講演 「日本の心、お米～伝統を食べる」
 講師 藤岡 弘(俳優)
- (2)シンポジウム -食と農の学び- (「食を考える国民会議」との共催)
- | | | |
|------------|-------------------|------|
| 平成13年12月6日 | 愛知県女性総合センター(名古屋市) | 500人 |
|------------|-------------------|------|
- ①基調講演 「命こそ宝～大腸ガンを克服して」
 講師 中原 ひとみ(女優)
- ②パネルディスカッション 「田んぼは日本の命です～食と農を学び健全な生活を～」
 コーディネーター 松田 輝雄(フリーアナウンサー、元NHKアナウンサー)
 パネリスト 鈴木 雅子(福山市立女子短期大学教授、医学博士)
 中野 重人(日本体育大学教授、日本生活科・総合的学習教育学会会長)
 中村 靖彦(農政ジャーナリスト、元NHK解説委員、当協議会理事)
 村橋 暁(愛知県一宮市立西成東小学校校長)
- ※NHK教育テレビ「金曜フォーラム」で放映(平成14年5月17日23:00～0:15)
- (3)「おむすびの日」の普及啓発
- ・記念アンケートの実施(おこめ券プレゼント) 応募者数 113,000名
 - ・小冊子「ふるさとのおむすび」プレゼントキャンペーン 応募者数 14,400名
 - ・小冊子「ふるさとのおむすび」作成・配布(7万部)
 - ・JA全中お米ギャラリーとの共催イベント(3か所)、会員との共催イベント(全国9か所)
- (4)ごはんを食べよう国民運動語りべ10万人作戦の展開
- ・パンフレット「ごはんを食べよう」5万部作成・配布
- (5)インターネットホームページでの情報提供
- 年間アクセス件数 83,926件
- (6)知事と語る食と農の県民会議の共催 3県(山形、福井、大分) 1,350人
- (7)お米カルチャー教室の共催 7都県(東京、新潟、石川、岐阜、奈良、佐賀、鹿児島) 8,590人



平成14年度

1 総会・幹事会

平成14年 6 月19日	総会(都道府県会館:東京都千代田区)
平成14年10月17日	第1回幹事会(都道府県会館:東京都千代田区)
平成15年 3 月19日	第2回幹事会(都道府県会館:東京都千代田区)

2 主な活動

(1)情報交換会

平成14年 6 月19日	都道府県会館(東京都千代田区)	134人
①講演 講師	「豊かな食育とは～ごはんのある食卓と地域のパートナーシップ」 足立 己幸(女子栄養大学大学院教授、当協議会理事)	
②活動発表	新潟県「新潟県の米消費拡大事業の実施概況」 大分県「ごはんで元気～米消費拡大への取り組み」 日本生活協同組合連合会 「レシピ募集と記念料理本『たべる、大切ブック企画と結果』」	

③会員の運動普及啓発資料の展示

(2)「おむすびの日」の普及啓発

- ・記念アンケートの実施(おこめ券プレゼント) 応募者数 57,311名
- ・小冊子「ふるさとのおむすび」「ふるさとのすし」プレゼントキャンペーン 応募者数 18,923名
- ・JA全中お米ギャラリーとの共催イベント(4か所)、会員との共催イベント(全国16か所)

(3)ごはんを食べよう国民運動語りべ10万人作戦の展開

- ・パンフレット「ごはんを食べよう」の改訂版5万部作成・配布

(4)「ごはん食キャンペーン」の展開

①小冊子「ふるさとのすし」7万部作成・配布
②「ごはんがすすむ我が家の自慢のこの一品&ショートエッセイ」の募集、PR
募集期間:平成14年11月～平成15年2月
応募数:984点(応募者全員に小冊子「ふるさとのすし」を送付)
特別賞:100点(特別賞受賞者におこめ券5,000円分を送付)
活用:特別賞作品をホームページで紹介
特別賞作品を集めたレシピ集を1,000部作成、配布

(5)「ふるさとの食につぼんの食」全国フェスティバルでの出展

日時:平成15年3月21日～23日 10:00～16:00
(ただし、当協議会からのPRは3月23日のみ)
場所:NHK放送センター正面玄関前広場、代々木公園並木通り他(東京都渋谷区)
来場者数:91,000人

(6)インターネットホームページでの情報提供

- ・子ども向けページ「ごはんとお米Q&A」の開設
- ・年間アクセス件数 139,623件

(7)お米カルチャー教室の共催 1県(愛媛)

平成15年度

1 総会・幹事会

平成15年7月4日	総会(都道府県会館:東京都千代田区)
平成15年10月27日	第1回幹事会(都道府県会館:東京都千代田区)
平成16年3月23日	第2回幹事会(都道府県会館:東京都千代田区)

2 主な活動

(1)活動事例発表会

平成15年7月4日	都道府県会館(東京都千代田区)	139人
①講演 講師	「ごはんがすすむ我が家の自慢のこの一品」 竹内 富貴子(カロニック・ダイエット・スタジオ主宰)	

- ②活動事例発表
 - 埼玉県「埼玉県における地産地消運動について」
 - 主婦連合会「米の消費動向調査」
 - 岩手県「岩手県における米消費拡大事業」
- ③会員の運動普及啓発資料の展示
- (2)地方大会の開催
 - 埼玉大会「地産地消フォーラム」(平成16年1月31日、さいたま市、650人)
 - 広島大会「お米フェスタ広島2004」(平成16年2月29日、広島市、375人)
- (3)「おむすびの日」の普及啓発
 - ・記念アンケートの実施(おこめ券プレゼント) 応募者数 68,604名
 - ・小冊子「ふるさとのおむすび」「ふるさとのすし」「ふるさとのどんぶり」プレゼントキャンペーン
応募者数 18,473名
 - ・JA全中お米ギャラリーとの共催イベント(4か所)、会員との共催イベント(全国21か所)
- (4)「ごはん食キャンペーン」の展開
 - ・四季ごとにごはんを組み合わせた朝ごはん献立の募集・紹介
募集期間 秋:平成15年9月1日～11月30日
冬:平成15年12月1日～16年2月29日
応募件数 秋:151点(小中学生の部30点、一般の部121点)
冬:393点(小中学生の部278点、一般の部115点)
ホームページで投票により最優秀賞を決定
 - ・小冊子「ふるさとのどんぶり」(5万部)作成・配布
 - ・親子で学ぶ食育実践資料として紙芝居「朝ごはんたべた? -みんなの金メダル-」(350部)作成・配布
 - ・国民運動シンボルマーク入りのしゃもじやおむすびケース等のグッズの配布
- (5)インターネットホームページでの情報提供
年間アクセス件数 225,358件
- (6)国際コメ年日本委員会への参画(「幹事」として参加)

平成16年度

1 総会・幹事会

- 平成16年 6 月18日 総会(都道府県会館:東京都千代田区)
- 平成16年10月19日 第1回幹事会(都道府県会館:東京都千代田区)
- 平成17年 3 月14日 第2回幹事会(都道府県会館:東京都千代田区)

2 主な活動

- (1)情報交換会
 - 平成16年6月18日 都道府県会館(東京都千代田区) 150人
 - ①活動事例発表
 - 広島県「お米フェスタ広島の概要と食の安全安心確保対策事業」
 - (社)農村環境整備センター「みんなで学ぼう『田んぼの学校』」
 - ②講演
 - 「おいしく食べる幸せ -食の基本を考える-」
 - 講師 小林 カツ代(料理研究家)
- (2)地方大会の開催
 - 静岡大会「全国お米まつり in しずおか」(平成16年11月4～7日、静岡市、92,307人(全体延べ人数))
 - 岩手大会「いわて純情米お宝フェスタ」(平成16年11月20～21日、盛岡市、9,441人(全体延べ人数))
- (3)「おむすびの日」の普及啓発
 - ・記念アンケートの実施(おこめ券プレゼント) 応募者数 29,680名
 - ・おむすびにまつわる絵てがみメッセージの募集 応募者数592件 優秀賞10点、佳作50点
 - ・JA全中お米ギャラリーとの共催イベント(4か所)、会員との共催イベント(全国25か所)
- (4)「ごはん食キャンペーン」の展開
 - ・四季ごとにごはんを組み合わせた朝ごはん献立の募集・紹介
応募件数 春:338点(小中学生の部85点、一般の部253点)
夏:241点(小中学生の部99点、一般の部142点)
ホームページで投票により最優秀賞を決定



- 小冊子「世界のくらしと米」(食育実践資料)の作成(3万部)
 - 国民運動シンボルマーク入りのボールペン、巾着、歯ブラシ、クリアフォルダー等のグッズの配布
- (5)インターネットホームページでの情報提供
年間アクセス件数 184,786件

平成17年度

1 総会・幹事会

平成17年7月12日	総会(全国町村会館:東京都千代田区)
平成18年3月22日	幹事会(JAビル(全中):東京都中央区)

2 主な活動

(1)情報交換会

平成17年7月12日	全国町村会館(東京都千代田区)	150人
①活動事例発表	静岡県「全国お米まつり in しずおか開催結果報告」 全国地域婦人団体連絡協議会(京都府連合婦人会) 「食事づくりとコミュニケーション -23号台風被害の支援活動を通して-」	
②講演	「伝えたい、ごはんと和食の底力」	
講師	小泉 武夫(東京農業大学教授)	
③会員の運動普及啓発資料の展示		

(1)地方大会の開催

長崎大会「ごはんを食べよう推進フォーラム」(平成18年1月27日、諫早市、330人)
兵庫大会「防災と食料を考えるフォーラム」(平成18年2月11日、神戸市、350人)

(2)「おむすびの日」の普及啓発

- 記念アンケートの実施(おこめ券プレゼント) 応募者数 11,764名
- JA全中お米ギャラリーとの共催イベント(4か所)、会員との共催イベント(全国23か所)

(3)「ごはん食キャンペーン」の展開

- 小冊子「食育ドリル」(食育実践資料)の作成・配布(5万部)
- 普及啓発資料の提供、貸与
- 国民運動シンボルマーク入りのボールペン、巾着、歯ブラシ、クリアフォルダー等のグッズの配布

(4)インターネットホームページでの情報提供

年間アクセス件数 205,834件

平成18年度

1 総会・幹事会

平成18年6月21日	総会(都道府県会館:東京都千代田区)
平成19年3月20日	幹事会(JAビル(全中):東京都中央区)

2 主な活動

(1)情報交換会

平成18年6月21日	都道府県会館(東京都千代田区)	120人
①活動事例発表	全国農業協同組合中央会、兵庫県	
②講演	「日本の食文化～心と命を育むお米と食」	
講師	里中 満智子(漫画家、大阪芸術大学教授)	

(2)地方大会の開催

岡山大会「米まつり岡山2006」(平成18年10月14～15日、岡山市、60,000人(全体延べ人数))
新潟大会「2006県民こめまつり」(平成18年10月22日、新潟市、8,846人(全体延べ人数))

(3)「おむすびの日」の普及啓発

- 記念アンケートの実施(おこめ券プレゼント) 応募者数 10,295名
- JA全中お米ギャラリーとの共催イベント(2か所)、会員との共催イベント(全国12か所)

(4)「ごはん食キャンペーン」の展開

- 小冊子「食育ドリル」(食育実践資料)の増刷(2万部)・配布
- 普及啓発資料の提供、貸与

- (5)につぼん食育推進事業「日本型食生活地域実践モデル事業」(農林水産省補助事業)の実施
 (6)インターネットホームページでの情報提供
 年間アクセス件数 285,485件

平成19年度

1 総会・幹事会

- 平成19年6月19日 総会(虎ノ門パストラル:東京都港区)
 平成20年3月18日 幹事会(都道府県会館:東京都千代田区)

2 主な活動

(1)情報交換会

- 平成19年6月19日 虎ノ門パストラル(東京都港区) 100人
 講演 「早寝・早起き・朝ご飯・夕ご飯」
 講師 川勝 平太(静岡文化芸術大学学長、当協議会会長)

(2)地方大会の開催

- 石川大会「第29回石川の農林漁業祭」(平成19年10月13~14日、金沢市、107,000人(全体延べ人数))
 福島大会「ごはんを食べよう!食彩ふくしま地産地消推進フォーラム」(平成19年11月10日、郡山市、300人)

(3)「おむすびの日」の普及啓発

- ・記念アンケートの実施(おこめ券プレゼント) 応募者数 19,399名
- ・JA全中ごはんミュージアム・お米ギャラリーとの共催イベント(2か所)、会員との共催イベント(全国12か所)

(4)「ごはん食キャンペーン」の展開

- ・普及啓発資料の提供、貸与

(5)につぼん食育推進事業「地域における実践活動促進事業」(農林水産省補助事業)の実施

(6)インターネットホームページでの情報提供

- 年間アクセス件数 262,727件

平成20年度

1 総会・幹事会

- 平成20年6月13日 総会(全国都市会館:東京都千代田区)
 平成21年3月25日 幹事会(JAビル(全中):東京都中央区)

2 主な活動

(1)情報交換会

- 平成20年6月13日 全国都市会館(東京都千代田区) 100人
 講演 「高まる食品リスクと日本農業への期待」
 講師 嘉田 良平(当協議会理事・幹事長)

(2)地方大会の開催

- 秋田大会「第3回食の国あきた県民フェスティバル」
 (平成20年10月11~12日、秋田市、25,000人(全体延べ人数))
 富山大会「第32回富山県米まつり」(平成20年10月25~26日、富山市、37,000人(全体延べ人数))

(3)「おむすびの日」の普及啓発

- ・記念アンケートの実施(おこめ券プレゼント) 応募者数 30,318名
- ・JA全中ごはんミュージアム(1か所)、会員との共催イベント(全国12か所)

(4)につぼん食育推進事業「食育先進地モデル実証事業」(農林水産省補助事業)の実施

(5)「ごはん食キャンペーン」の展開

- ・普及啓発資料の提供、貸与
- ・食育ドリルのダウンロード化(会員専用)

(6)インターネットホームページでの情報提供

- 年間アクセス件数 245,383件



平成21年度

1 総会・幹事会

- 平成21年7月10日 総会(都道府県会館:東京都千代田区)
平成21年10月16日～31日 総会(書面による開催:新会長の選出)
平成22年3月18日 幹事会(米穀安定供給確保支援機構:東京都中央区)

2 主な活動

(1)情報交換会

- 平成21年7月10日 都道府県会館(東京都千代田区) 80人
講演 「FOOD ACTION NIPPONについて」
講師 上條 典夫
(FOOD ACTION NIPPON推進本部総合プロデューサー、(株)電通 ソーシャルプランニング局長)

(2)地方大会の開催

- 奈良大会「食と農のフェスティバル」(平成21年10月31日～11月1日、橿原市、52,000人(全体延べ人数))
福井大会「お米フェスティバル」(平成22年3月21日、坂井市、3,000人(全体延べ人数))

(3)「おむすびの日」の普及啓発

- ・記念アンケートの実施(おこめ券プレゼント) 応募者数 9,070名
- ・JA全中ごはんミュージアムとの共催イベント、会員との共催イベント(全国16か所)

(4)「ごはん食キャンペーン」の展開

- ・普及啓発資材の提供、貸与

(5)インターネットホームページでの情報提供

- 年間アクセス件数 302,620件

平成22年度

1 総会

- 平成22年6月24日 総会(全国都市会館:東京都千代田区)

2 主な活動

(1)情報交換会

- 平成22年6月24日 全国都市会館(東京都千代田区)
講演 「生物多様性をはぐくむ日本農業について」
講師 林 良博(東京大学名誉教授、当協議会会長)

(2)地方大会の開催

- 栃木大会「とちぎ“食と農”ふれあい2010」(平成22年10月23～24日、宇都宮市、110,000人(全体延べ人数))
滋賀大会「第18回JALレーク大津農業まつり」(平成22年11月27日、大津市、10,000人(全体延べ人数))

(3)「おむすびの日」の普及啓発

- ・記念アンケートの実施(おこめ券プレゼント) 応募者数 11,686名
- ・会員との共催イベント(全国19か所)

(4)「ごはん食キャンペーン」の展開

- ・普及啓発資材の提供、貸与

(5)インターネットホームページでの情報提供

- 年間アクセス件数 225,901件

平成23年度

1 総会・幹事会

- 平成23年11月4日 総会(東京ファッションタウンビル:東京都江東区)
平成23年9月14日 第1回幹事会(米穀安定供給確保支援機構:東京都中央区)
平成24年3月21日 第2回幹事会(米穀安定供給確保支援機構:東京都中央区)

2 主な活動

(1)講演会

- 平成23年11月4日 東京ファッションタウンビル(東京都江東区)
 ①活動報告 林 良博(東京大学名誉教授、当協議会会長)
 ②講演 「次世代へ引き継ごう豊かな農山漁村」
 講師 ダニエル・カール(タレント、翻訳家、実業家)

(2)第50回農林水産祭「実りのフェスティバル」への出展

平成23年11月4～5日 東京ビックサイト(東京都江東区) 46,000人(全体延べ人数)

(3)「おむすびの日」の普及啓発

- ・記念アンケートの実施(おこめ券プレゼント) 応募者数 12,307名
- ・会員との共催イベント(全国10か所)

(4)「ごはん食キャンペーン」の展開

- ・普及啓発資材の提供、貸与

(5)インターネットホームページでの情報提供

年間アクセス件数 220,528件

平成24年度

1 総会・幹事会

- 平成24年8月 総会(書面による開催)
 平成25年3月18日 幹事会(米穀安定供給確保支援機構:東京都中央区)

2 主な活動

(1)特別セミナー「米粉と日本酒の消費拡大をどう図るか」

- 平成24年11月9日 航空会館(東京都港区)
 ①講演 「自給率アップにも貢献!これからの日本の食文化を支える米粉の魅力」
 講師 陣田 靖子(米粉料理研究家)
 ②講演 「日本酒の魅力と米の消費拡大に向けた取り組みについて」
 講師 上松 昇(株福光屋研究開発部主任研究員、生産二部課長)
 ③パネルディスカッション 「米の更なる消費拡大に向けて」
 コーディネーター 嘉田 良平(総合地球環境学研究所教授、当協議会理事・幹事長)
 パネリスト 林 良博(東京農業大学農学部バイオセラピー学科教授、当協議会会長)
 陣田 靖子(米粉料理研究家)
 上松 昇(株福光屋研究開発部主任研究員、生産二部課長)
 小倉 寿子(日本生活協同組合連合会理事、生活協同組合ちばコープ理事)

(2)第51回農林水産祭「実りのフェスティバル」への出展

平成24年11月10～11日 日比谷公園(東京都千代田区) 64,000人(全体延べ人数)

(3)「おむすびの日」の普及啓発

- ・記念アンケートの実施(おこめ券プレゼント) 応募者数 22,913名
- ・会員との共催イベント(全国18か所)

(4)ごはん食キャンペーンの展開

- ・普及啓発資材の提供、貸与

(5)インターネットホームページでの情報提供

年間アクセス件数 242,166件

平成25年度

1 総会・幹事会

- 平成25年7月 総会(書面による開催)
 平成26年3月18日 幹事会(都道府県会館:東京都千代田区)



2 主な活動

(1)特別セミナー「米粉と日本酒の消費拡大をどう図るか」

平成26年3月18日 都道府県会館(東京都千代田区)

①講演 「日本酒の魅力発信」

講師 あおい 有紀(フリーアナウンサー・酒サムライ)

②講演 「米粉の本物志向の菓子作り」

講師 由城 隆朗(群馬製粉(株)社長室長)

③パネルディスカッション 「米の更なる消費拡大に向けて」

コーディネーター 嘉田 良平(総合地球環境学研究所教授、当協議会理事・幹事長)

パネリスト 林 良博(国立科学博物館館長、当協議会会長)

あおい 有紀(フリーアナウンサー・酒サムライ)

由城 隆朗(群馬製粉(株)社長室長)

(2)第52回農林水産祭「実りのフェスティバル」への出展

平成25年11月8～9日 明治公園・霞丘(東京都新宿区) 31,000人(全体延べ人数)

(3)「おむすびの日」の普及啓発

・記念アンケートの実施(おこめ券プレゼント) 応募者数 14,218名

・会員との共催イベント(全国19か所)

(4)「ごはん食キャンペーン」の展開

・普及啓発資材の提供、貸与

(5)インターネットホームページでの情報提供

年間アクセス件数 225,844件

平成26年度

1 総会・幹事会

平成26年9月2日 総会(都道府県会館:東京都千代田区)

平成27年3月 幹事会(書面による開催)

2 主な活動

(1)講演会

平成26年9月2日 都道府県会館(東京都千代田区)

①講演 「米文化が育む日本の社会」

講師 永島 敏行(俳優、青空市場代表)

②取り組み発表

農林水産省生産局農産部 穀物課 係長

日高 里美

福井県東京事務所 企画主査

竹内 健

静岡県経済産業部 農林業局茶業農産課 主査

平形 裕子

(公社)米穀安定供給確保支援機構 消費拡大事業部 次長

森嶋 道子

(2)第53回農林水産祭「実りのフェスティバル」への出展

平成26年10月31日～11月1日 サンシャインシティ・ワールドインポートマートビル(東京都豊島区)

41,000人(全体延べ人数)

(3)「おむすびの日」の普及啓発

・記念アンケートの実施(おこめ券プレゼント) 応募者数 15,482名

・会員との共催イベント(全国19か所)

(4)「ごはん食キャンペーン」の展開

・普及啓発資材の提供、貸与

(5)インターネットホームページでの情報提供

年間アクセス件数 239,187件

平成27年度

1 総会・幹事会

- 平成27年10月 総会(書面による開催)
 平成28年2月3日 幹事会(製粉会館:東京都中央区)

2 主な活動

(1)特別セミナー

- 平成28年2月3日 製粉会館(東京都中央区)
 講演 「お米の新たな魅力」～食物アレルギーにも安心。米粉の力～
 講師 萩田 敏
 (NPO法人国内産米粉促進ネットワーク副理事長、komeko50研究会代表)

(2)第54回農林水産祭「実りのフェスティバル」への出展

- 平成27年11月13～14日 サンシャインシティ・ワールドインポートマートビル(東京都豊島区)
 51,000人(全体延べ人数)※秋篠宮殿下、同妃殿下によるご視察があった

(3)「おむすびの日」の普及啓発

- ・記念アンケートの実施(おこめ券プレゼント) 応募者数 16,685名
- ・会員との共催イベント(全国18か所)

(4)「ごはん食キャンペーン」の展開

- ・普及啓発資材の提供、貸与

(5)インターネットホームページでの情報提供

- 年間アクセス件数 215,529件

平成28年度

1 総会

- 平成28年10月 総会(書面による開催)

2 主な活動

(1)第55回農林水産祭「実りのフェスティバル」への出展

- 平成28年11月11～12日 サンシャインシティ・ワールドインポートマートビル(東京都豊島区)
 47,000人(全体延べ人数)

(2)「おむすびの日」の普及啓発

- ・記念アンケートの実施(おこめ券プレゼント) 応募者数 7,884名
- ・会員との共催イベント(全国19か所)

(3)「ごはん食キャンペーン」の展開

- ・普及啓発資材の提供、貸与

(4)インターネットホームページでの情報提供

- 年間アクセス件数 209,568件

平成29年度

1 総会

- 平成30年1月 総会(書面による開催)

2 主な活動

(1)「おむすびの日」の普及啓発

- ・記念アンケートの実施(おこめ券プレゼント) 応募者数 7,146名
- ・会員との共催イベント(全国4か所)

(2)「ごはん食キャンペーン」の展開

- ・普及啓発資材の提供、貸与

(3)インターネットホームページでの情報提供

- 年間アクセス件数 234,685件





ごはんを食べよう国民運動推進協議会理事・幹事長

四條畷学園大学教授(総合地球環境学研究所名誉教授) 嘉田 良平

言うまでもなく、「ごはんを食べよう国民運動」が始まる契機となったのは、平成7年1月17日に発生した阪神・淡路大震災であった。水道はストップし、食べ物はなく、被災地の人々は不安のどん底に追い込まれた。この惨たんたる状況の被災地に、やがてボランティアの善意によって、飲用水、炊き出しのごはん、おむすび等が次々と届けられた。改めて被災者は、ボランティアの方々に感謝するとともに、ごはんを作り届けてくれる近隣の農業者や農村の大切さを実感することになったのである。

当時、故貝原知事の呼びかけによって兵庫県で生まれたこの運動は、やがて強い共感とともに多くの都道府県に広まり、全国区の国民運動へと展開することになった。私は貝原さんの依頼を受け、運動の構想・準備段階からこの運動に関わり、それ以来、全国協議会の幹事長として兵庫県庁の担当者の方々と共に20余年働かせていただき、今日に至っている。

忘れてならないのは、この国民運動が掲げてきた理念と運動の手法が今なお、まったく色あせていないことである。それどころか、近年各地で多発している大洪水や土砂崩れなどの自然災害と被害の拡大、そしてその後の復旧活動やボランティアの活躍を見るにつけ、この国民運動が築きあげてきた理念と実践の歴史が金字塔のごとくますます輝きを増していることを痛感している。

大震災はお米の大切さを教えてくれたが、同時に、水田の持つ保水力や水質の浄化、土壌の流出防止機能など、環境保全面における水田の価値を見直すきっかけともなった。他方、この運動をきっかけとして、赤とんぼやホタルなど、多くの昆虫や田んぼのいきものと共生することの意義、生物多様性の価値についても、国民運動は各地で啓発活動を展開してきた。

だが、現実には、貴重な水田は知らず知らずのうちに減り続け、ますます荒廃しつつある。米の消費減退や稲作農家の高齢化が主な理由だが、水田の耕作放棄は続いている。その結果、田んぼの持つ貯水機能は失われ、洪水の発生や土砂災害の一大要因ともなっている。それゆえにこそ、阪神・淡路大震災の「おむすび」や「ボランティア」への想いを風化させることなく、後世へ伝えていかねばならないと強く思う。

私にとって一番の思い出は、阪神・淡路大震災から10年目の節目に実施した「おむすびにまつわる絵がみメッセージ」の審査と取りまとめ作業であった。当時、この募集に対して、老若男女を問わず全国から数多くの応募と反響があったが、その審査の過程で、私は人々のおむすびへの熱い思いを痛感することができた。集団疎開の思い出、遠足や運動会で食べたおむすびの味、被災時の感謝の気持ちなど、いずれの作品からも、握る人の思いと握ってくれた人への感謝の気持ちが切々と伝わってきた。

たしかに、米を主食とする日本人にとっておむすびはあまりに日常的であり普段は意識しない存在であるが、そのパワーは相当なものである。おむすびは、美味しさ、手軽さ、栄養価、そして何より握ってくれた人の体温が感じられる不思議な存在である。それはまた、食べる人だけでなく、握る人をも幸せにしてくれる。世界にファストフードは数多くあるが、これほどのパワーを発揮してくれる食品はおむすびをおいて他にないだろう。人々に安心と元氣、笑顔と勇気を届けてくれるおむすび、それは人と人とを結び合わせ、大きな感動と希望の灯を灯してくれる存在でもある。

おむすびパワーは永遠なり、私はそう信じている。平成12年12月に1月17日は「おむすびの日」(日本記念日協会登録済)と制定されたが、この日は震災記念であると同時に、こうした素晴らしい「おむすびパワー」を再認識する記念日でもある。

○おむすびにまつわる絵てがみメッセージ(平成16年度事業)から抜粋

阪神・淡路大震災から10年が経過し、ボランティアへの感謝、食料や危機管理の大切さ等をあらためて見直すきっかけとするため、平成16年度に“人と人とを結ぶ”おむすびへの想いを「絵てがみ」として募集し、入賞作品を決定した。



「怖かった寒かった
三日目に食べたおにぎり
おいしかった」
(兵庫県 西村 真弓さん)



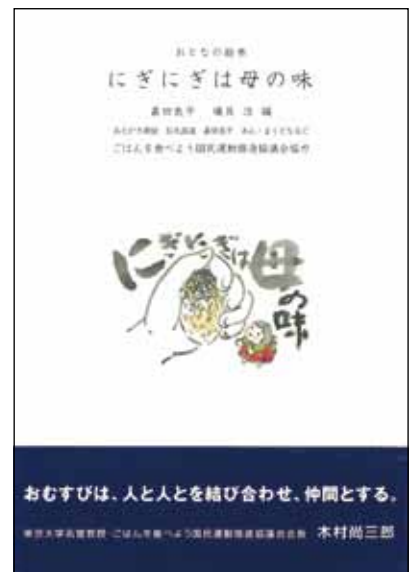
「頑張ろう!
おむすび握る手
心がこもる」
(千葉県 皆川 康子さん)



「ばあちゃんが作ってくれた大きなおむすび。『旨い、うまい』とじいちゃんと食べた大きなおむすび。今、おむすびを食べるたびにじいちゃんとはあちゃんとの楽しい思い出が蘇ってきます。」
(東京都 福岡 修さん)

○おとなの絵本 『にぎにぎは母の味』

発行年月:平成18年7月
編 者:嘉田 良平・磯貝 浩
序 文:木村 尚三郎、嘉田 良平
鼎 談:石毛 直道・嘉田良平・あんまくだなど
協 力:ごはんを食べよう国民運動推進協議会
発 行:アサヒビール
編集発売:清水弘文堂書房
頁 数:71ページ



「おむすびは、人と人をつなぎ合わせ、仲間とする。」

木村 尚三郎 東京大学名誉教授(ごはんを食べよう国民運動推進協議会会長(当時))~帯紙(表)より~

「じつはお米って、ものすごく効率がよくて、しかも必須アミノ酸という人間が体のなかでつくりだせない良質のタンパク質をもっている食べ物なんですよ」

今井 通子 登山家・医学博士(ごはんを食べよう国民運動推進協議会副会長)~帯紙(裏)より~



未来へつなぐ

今般、記録誌を刊行するにあたり、幹事の任に加え地方大会の開催などで特にご尽力いただいた8道県に、国民運動とともに発展した各道県独自のごはん食の普及啓発の取り組み等について、執筆をお願いした。

その中には、阪神・淡路大震災後に大きな被災体験をされた県からのメッセージも含まれている。

—1つのおむすびがもたらす幸せ—

私たち会員はこのメッセージを確かに受け取り、おむすびのありがたさ、お米の大切さを再びかみしめる。そして国民運動の理念を未来へつないでいくため、今日からまた新たな一歩をあゆみはじめる —



◆ごはんを食べよう国民運動との関わり

北海道では、ごはんを食べよう国民運動推進協議会の設立当初より幹事の一員として運営の一端を担うとともに、協議会作成の啓発資材をさっぽろ雪まつり等の地域イベントで配布するなど、米の消費拡大及びごはん食の普及啓発活動を行ってきました。

道知事が協議会副会長に就任した平成23年度には、道と包括連携協定を結んでいるスーパーマーケットやコンビニエンスストアと連携し、「おむすびの日」に合わせ、道内の3社900店舗以上で北海道米を100%使用したおむすびを販売するとともに、のぼりやPOPの店内掲示、チラシへの知事コメントの掲載など、「おむすびの日」の普及に取り組みました。

平成29年度には、道内の主要なスーパーやコンビニなど13社、約2,000店舗で「おむすびの日」に合わせたキャンペーンを展開するなど、着実な拡がりを見せています。



「おむすびの日」キャンペーンで
道知事が店舗を訪問

◆北海道独自のごはん食普及啓発運動の取り組み

昭和63年に誕生した「きらら397」が、それまでの北海道米のイメージを覆し、大ヒットして以降、試験研究機関での新品種の開発をはじめ、良食味生産のための技術普及、JA等によるタンパク値での仕分集荷、農業団体主体の「北海道米販売拡大委員会」を中心としたテレビCM等による積極的なPR活動などもあり、今では「ゆめぴりか」や「ななつぼし」をはじめとする北海道米の人気・認知度は、全国区となっています。

道では、協議会設立2年前の平成9年度より、農業団体や消費者団体、経済団体等からなる地産地消の推進組織を設置して「愛食運動」を展開し、平成17年度からは、北海道米販売拡大委員会をはじめ、農業、米穀卸・小売業、スーパー、ホテル・旅館業、飲食業など幅広い業界団体からなる「北海道米食率向上戦略会議」を設立し、それまで

60%程度で停滞していた道内食率(道内の米消費量に占める北海道米の割合)を東北や北陸など米主産県並みの80%以上に引き上げることを目標に、「米チェン」、「北海道米LOVE」などの北海道米応援キャンペーンを展開するとともに、田植え・稲刈り体験や料理教室・食育講座の開催などを通じて、稲作やお米・ごはんについての理解を深めてもらうなど、ごはん食の普及・啓発を行っています。



「北海道、ごはん道?」
年間を通じてごはん食機会を提案

◆日本一の米どころを目指して

こうした取り組みにより、道内食率は近年85%を超えて推移する一方、一人当たりの米消費量は年々減少傾向にあることから、戦略会議の取り組みとして、平成30年度は「北海道、ごはん道?」のキャッチフレーズの下、スーパーやコンビニ、飲食店等でのごはん食商品の販売と、テレビCM、雑誌など各種メディアを通じたPRの連動により、年間を通じたごはん食機会を提案するプロモーションを展開しています。

今後も北海道では、おいしいお米の生産に努めていくとともに、様々な機会にごはんを中心とした食生活の普及に取り組むことで、生産から消費まで、日本一の米どころとなることを目指していきます。

福島県

(当協議会幹事：平成15年度～17年度)

◆ごはんを食べよう国民運動との関わり

福島県では、県や業界団体、消費者団体等から構成される福島県米消費拡大推進連絡会議が主体となって設立当初から運動との関わりを持ち、平成15年～17年までの間、幹事を務めさせていただいた他、平成19年度には支援をいただき「ごはんを食べよう!食彩ふくしま地産地消推進フォーラム」等を開催し、日本型食生活と地元農産物の理解促進を図り県内の米消費拡大に努めてきました。



ごはんを食べよう!
食彩ふくしま地産地消推進フォーラム

◆福島県独自のごはん食普及啓発運動の取り組み



平成18年度米飯給食拡大推進ポスター
コンクール表彰式

福島県では、県独自の取り組みとして平成19年度まで小中学生を対象に米飯給食拡大推進ポスターコンクールを開催し、最優秀作品をポスターに採用し関係団体への配布を行うなど、子供達のお米への関心を高めるとともに、地域として学校給食でのご飯給食の重要性を理解していただく取り組みを行ってきました。他に、平成18年～22年にかけて米飯給食推進事業を実施し、専門家を招いた研修会や、出張出前講座の開催により学校給食関係者や父兄へ「お米の栄養」や「伝統食との関係結びつき」の普及啓発を通じて米飯給食の普及拡大に努めました。

◆震災以降の取り組み

平成23年3月に発生した東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所事故の影響により福島県産農林水産物の販売が低迷したことから、県として新聞、雑誌広告、テレビCM等メディアの活用や、様々なイベント出展をとおして一般消費者及び事業者に対して安全安心の取り組みのPRを行い風評払拭に努めてきました。特に米については、県のみならず、福島県米消費拡大推進連絡会議も一体となりながら、一般消費者に対して安全安心の周知を行いました。

一方で、平成25年度より、米を中心とした日本型食生活や地産地消の普及啓発を目的とした、「ふくしまっご飯コンテスト」を後援する形で、家庭へ福島米の美味しさ、素晴らしさを伝える取り組みを継続して行ってきました。

このような取り組みの中で、風評から一時地元産農産物の利用が控えられていた県内の学校給食においても、全ての小中学校で県産米の利用が復活するなど、米を中心とした地産地消が回復しつつあります。

風評が根強いことから、引き続き、福島県産米の価格回復、販路拡大に向け働きかけを行うとともに、米の消費喚起についても継続して取り組みを行っていきます。



◆ごはんを食べよう国民運動との関わり

新潟県では、ごはんを食べよう国民運動推進協議会の設立趣旨に賛同し、設立当初から会員として加入しています。平成18年度には新潟県米消費拡大推進協議会が開催する「県民こめまつり」と共催で国民運動・新潟大会を開催し、来場者8,846名に対し「ごはんを食べよう」をテーマに、ステージ上でのおむすびづくり大会、いろいろおむすびの販売、ごはんの食べ比べ、米粉パンの販売、米粉入りらーめんの実演販売を行ったほか、ごはんの食味クイズ、「1日に食べるお米の量を量ってみよう」「パソコンで食事バランスチェック」「脳と体の瞬発力チェック」などのブースを展開し、ごはん食の健康性への理解促進を図りました。加えて、平成12年度～14年度及び平成24年度～26年度にかけては、推進協議会幹事として会務の運営を担いました。



国民運動新潟大会

◆新潟県独自のごはん食普及啓発運動の取り組み



大学生米ふれあいスクールの様子

新潟県では、新潟米需要拡大キャンペーンを展開し、県内の協賛店舗と連携した新潟米の販売プロモーションの実施及び統一ロゴマークを使用した販売促進資材の提供等を行っています。また、新潟米宣伝会として、首都圏の方に向けて新潟米のプロモーションを行っています。

加えて、関係団体で構成される新潟県米消費拡大推進協議会では、幼稚園児等を対象とした親子でおにぎりづくり、高校生や大学生を対象とした米ふれあいスクールなど、各階層に向けた米の消費拡大と「ごはん食」の大切さや重要性についての理解促進を図る取り組みを行っています。

◆国民運動を踏まえた今後の取り組み

若者のごはん離れが指摘される中、「一人ひとりが“お米”を通じて、これまで先人たちが営々として築いてきた豊かな食文化、美しい日本の自然を将来に継承し、いつまでも健康的な生活が送れるよう、消費者や生産者、企業や行政などが一体となった運動を推進する」という国民運動の趣旨を踏まえ、引き続きごはん食の普及のための取り組みを進めていくことが重要です。

新潟県は、米の作付面積、収穫量及び産出額いずれも全国一位であり、県の農業産出額の約6割を米が占めている米の一大生産地として、今後も県内外において新潟米の需要拡大の取り組みを実施するとともに、新潟県米消費拡大推進協議会が実施する幼児期における食農教育などを通じ「ごはん食を中心とした日本型食生活」への理解促進や普及啓発を実施していきます。

静岡県

(当協議会幹事：平成24年度～26年度)

◆ごはんを食べよう国民運動との関わり

静岡県では、平成19年から20年まで、川勝平太知事(就任当時静岡文化芸術大学学長)が、推進協議会の2代目会長を務め、現在も顧問を務めています。また、平成24年から26年までは、幹事県になるなど、運動の推進に関与してきました。

さらに、平成16年には「ごはんを食べよう国民運動大会」と「全国お米まつり in しずおか」を共催し、その中で消費者向けのセミナー、イベント、お米日本一コンテストを開催しました。お米の選び方、炊き方等の情報や、おいしいおにぎりを提供し、消費者にお米への興味や関心を持ってもらう、また良食味米づくりにつながるような取り組みを行いました。現在は、「お米日本一コンテスト in しずおか」として、継続して開催しており、ごはんを食べよう国民運動推進協議会には御後援をいただいております。



お米日本一コンテスト in しずおか

◆静岡県独自のごはん食普及啓発運動の取り組み



ふじのくに食と花の都の祭典

上記の「お米日本一コンテスト in しずおか」については、お米、ごはんを中心とした和食文化の推進、良食味米の産地育成、消費拡大を目的として、前述のとおり平成16年から開催しています。全国から出品を募り、機器審査と食味官能審査からその年の最もおいしいお米を選出する本コンテストは、年々出品数が増加し、昨年は36道府県から43品種522点が出品されるなど、全国の米関係者に支持されています。また、本コンテストの開催以降、お米の消費県である県内では、消費者に選ばれるこだわりの米づくりが各地域で進むとともに、県産米の食味値も向上してきています。さらに、本コンテ

ストの盛り上がりは他の地域にも広がり、消費拡大に向けた新たな取り組みにも貢献しています。今年度は第15回目の開催となり、募集点数の拡大、また消費者向けのイベントの充実についても検討しています。

さらに、本県は多彩で高品質な農林水産物が生産される「食材の王国」であり、この力を活かし、「食と花」の魅力を一体的・効果的に発信することで、和の食文化の継承、県産品の消費拡大や生産振興を図るため、「ふじのくに食と花の都の祭典」を開催しており、このイベントを通じて、ごはん食の推進を図っています。

◆ごはんの消費拡大を目指して

設立20年となり推進協議会は解散しますが、運動の理念は今後とも引き継いでいきたいと考えています。

お米の需要量の減少等、お米を取り巻く環境は変化してきていますが、消費拡大につなげることができるよう、「お米日本一コンテスト in しずおか」や「ふじのくに食と花の都の祭典」の開催等を含め、様々な形で取り組みを続けていきます。またお米、ごはんの魅力や大切さについても同時に発信していきます。



◆ごはんを食べよう国民運動との関わり

三重県でのごはんを食べよう国民運動の代表的な取り組みとして、平成26年から実施している「おむすびの日!県産米を食べよう」というイベントがあります。

「おむすびの日」に合わせ、県内の量販店約10店舗で、県が開発したブランド米「結びの神」等の県産米を使用したおむすびを販売する他、のぼり・ポップの掲示によるPRを実施、県庁やJAビルの食堂では、「結びの神」等の県産米を使用した特別メニューを提供しました。

多くの方に「おむすびの日」を知ってもらい、お米やごはんの大切さ、人と人との善意による結びつきの尊さを、考えるきっかけになればと続けています。



H30.1.17県庁食堂

◆三重県独自のごはん食普及啓発運動の取り組み



量販店でのキャンペーン

三重県では、ごはん食推進の取り組み母体として「みえの米ブランド化推進会議」があります。当会議は、行政、生産者団体、米卸、他関係機関が一体となり、「人と自然にやさしい三重の米づくり」をコンセプトに、お米の生産・流通・消費拡大対策の展開、米飯学校給食への推進など、お米の評価向上を図ることを目的に活動しています。

ごはんを食べよう国民運動の趣旨にも賛同し、当会議や会議の参画団体それぞれにおいて、各種イベントへの出展、メディアへの広告掲載等、ごはん食推進に関するPR活動が実施されています。また、当会議の目的により、参画

団体による県内学校給食への県産米の供給や、県内小学校への小冊子の配布(三重の田んぼとお米:H24,H25)等、子供たちへごはん食の推進も継続的に実施しており、次の世代へごはん食をつないでいく取り組みも続けられています。

◆今後の取り組み

平成29年度に実施した県民アンケート調査によると、1か月間にお米を食べる量が3kg まで、という方で全体の約半分を占め、三重県でもお米の消費量は過去に比較して減少してきています。

一方、パンやうどん等、お米以外を食べる回数が週に2回以上という方が全体の約70%に上り、お米以外の主食を食べることが定着してきています。

このような中、三重県の方が県産米を選んで食べている割合は、約75%と高く、「みえのお米」は地元をしっかり根を張っています。

「みえのお米」が、県民に愛されるお米であり続けるため、また、ごはん食の良さを伝えていくため、ごはんを食べよう国民運動をきっかけに定着した「おむすびの日」等の各種のごはん食PR活動について、「みえの米ブランド化推進会議」と連携し、引き続き取り組みを実施していきます。

滋賀県

(当協議会幹事：平成21年度～23年度)

◆ごはんを食べよう国民運動との関わり

滋賀県ではごはんを食べよう国民運動推進協議会の目的に賛同し、これまでに大型量販店での近江米PRイベントの開催や啓発資材の作成(ティッシュ、風船等)などを行ってきました。

平成22年には国民運動大会として、「第18回JAレーク大津農業まつり」において、1日に食べるごはんの量の平均を体感できる「お米計りコーナー」を設置し、お米についての理解を促進するとともに、国民運動についてのパネル展示やチラシの配布等により当運動についての普及啓発を図りました。参加者数は10,000人を超え、多くの方々にごはんを食べよう国民運動を知っていただき、お米の消費拡大に寄与することができました。



国民運動滋賀大会「お米計りコーナー」

◆滋賀県独自のごはん食普及啓発運動の取り組み



平成30年3月17日(土) イオンモール草津にてイベント開催



滋賀県では米の生産、流通または消費に関係する団体および機関等が一体となって米の消費拡大運動を推進するため「滋賀県米消費拡大推進連絡協議会」を設立し様々な活動を行い、県民の理解と協力を促進しています。

その中で、さらなる米の消費衰退を食い止めるとともに、近江米の根強いファンを確保するため、近江米の消費拡大に向けた県民参加型の

運動《もっと食べよう「近江米」!県民運動》を平成27年度から展開しています。主な活動としては、県内の量販店で、近江米のイベントを開催し、消費者に近江米のファンとなって食べることで応援する「近江米もっと食べます宣言」をしていただき、近江米の消費拡大につとめています。さらに、タレントの宮川大輔氏に近江米PR隊長に就任していただき、毎年大型量販店でのイベントにおいて知事とともに、近江米の魅力発信に取り組んでいただいています。

◆ごはんをもっと食べよう!

全国的な米の消費量の減少、特に若年層の消費量の減少が顕著に進んでいるなど、米の生産県である滋賀県にとって深刻な問題となっています。

当県民運動では県内大学と連携し、大学祭での近江米のPRイベントの開催や近江米フォーラムを開催するなど、多くの若年層の方に「もっと近江米を食べてみたい!」と思ってもらえるよう、当県民運動を盛り上げていきます。



◆ごはんを食べよう国民運動との関わり

岡山県では、米の重要性の啓発、米の消費拡大運動を目的として、昭和52年に「米をみなおす運動推進協議会」を立ち上げ、その後「岡山県米消費拡大推進協議会」(平成元年4月)に名称変更しました。そして県協議会として、平成7年1月17日の阪神・淡路大震災の発生の際に被災地の阪神・淡路地区で行われたボランティアによる炊き出し(おむすび)をきっかけとして平成11年に始まった、「ごはんを食べよう国民運動」に参画しました。



米まつり岡山2006
～ごはんを食べよう国民運動おかやま大会～

◆岡山県独自のごはん食普及啓発運動の取り組み



プロ野球オープン戦PRイベント

岡山県米消費拡大推進協議会では、ごはんを食べよう国民運動推進協議会と共催し、毎年、地元大学生などから「おかやま米大使」を選出し、様々なイベントで若い世代をターゲットとした積極的なPRを行いました。

また、岡山県で栽培される「朝日」は、ブランド米品種「コシヒカリ」や「ササニシキ」など数々の優良品種のルーツの品種で、大粒で、しっかりした歯ごたえが特徴です。その「朝日」を使ったおにぎりを、JR岡山駅や、商店街、百貨店店頭などで配布し、岡山県のお米の消費拡大に向けたPRを行いました。

さらに、平成17年には、「元気いっぱい子のごはんパーティー」と題して、県内の保育園等で幼児と保護者を対象に、お米とごはん食についての講話や、おにぎり作り体験を実施し、子供たちへお米の大切さを伝えました。

平成18年10月には、一般消費者ら6万人を集め、「米まつり岡山2006～ごはんを食べよう国民運動おかやま大会～」を開催しました。

近年では各種フェアにおいて、岡山米の試食販売や特Aを取得した「きぬむすめ」のPRに取り組むとともに、おかやまマラソンでのもちつきの実演販売やプロ野球オープン戦でのおにぎり配布など、多くの方が集まるイベントでのPRに努めています。

◆ごはん食の大切さは変わらない

「和食」が世界遺産登録され、世界では和食がブームとなっています。一方で、米離れが進む瑞穂の国「日本」。美しい農村の景観は水田があってこそ。多くの雨を貯め、下流域の洪水を防ぐのも水田。また、多様な生き物を育み、育てるのも水田。お金で買えない多くのめぐみを支えるために、私たちはもっとお米のおいしさ、すばらしさ、楽しさを、引き続き伝えていかねばなりません。

熊本県

(当協議会幹事：平成15年度～17年度)

◆ごはんを食べよう国民運動との関わり

熊本県では、ごはんを食べよう国民運動推進協議会の理念に呼応した取り組みとして、次の事業を実施しています。

ごはん中心の日本型食生活と米食の更なる普及を図るため、小中学校栄養教諭・高校栄養職員、児童生徒及び保護者に対し、米(米粉含む)を活用した調理実習や講習会を開催し、毎年約1,200名が受講しています。

また、食育及び地産地消の理解を深めるため、小学校高学年を対象とした学習小冊子「くまもとのお米の本」を平成12年度から毎年作成し、小学校やJA、学校給食会等へ配布しています。この小冊子は、田植えや稲刈り体験等の食育活動(アグリキッズスクール)等で活用されています。関係者から大変好評を得ており、平成30年度は、これまでで最高の13,900部を発行しました。



くまもとのお米の本

◆熊本県独自のごはん食普及啓発運動の取り組み

平成21年3月に「くまもと地産地消県民条例」が定められ、県内の学校給食では、全て熊本県産米が使われています。また、平成21年度から、熊本県産米粉が入った米粉パンも学校給食に登場し、子供達に大変喜ばれています。

米粉需要拡大に関しては、食料自給率向上や水田の有効活用を図るため平成21年度から取り組みを始め、平成24年度には、家庭での県産米粉の活用促進に向けて44名の「くまもと米粉インストラクター」を県が独自に認定。米粉料理の出前講座や県内各地域での米粉料理教室、各種イベント出展等により、県産米粉の普及活動及び消費拡大を進めています。



県産米キャンペーン

また、高品質で安全・安心なトップグレード米産地の育成にも取り組んでおり、平成30年度は、県育成品種「くまさんの輝き」が本格デビューします。このお米は、炊き上がりのツヤと強い粘りがあり、冷めても美味しいのが特長で、平成28年、29年の一般社団法人日本穀物検定協会主催の米の食味コンクールで最高ランクの特Aと評価されました。今後、販売促進イベントなどにより、県産米としての認知度向上やブランド力の強化を図っていくこととしています。

◆かけがえのないお米に関する今後の取り組み

熊本県は、平成28年4月に最大震度7の地震に2度も襲われました。被災者の多くは暫くの間、これまで当たり前のように食べていた炊き立ての温かいごはんが食べられませんでした。やっと食べられた1個のおむすびは心にも体にも染み込み、改めてお米の大切さと、日常的にごはんが食べられる幸せに気付かされたところでした。

これまで熊本県は、西日本有数の米生産県であり、恵まれた環境のなかで良質米の栽培が行われてきました。今後も、県内の多様な自然条件を最大限に生かし、各地域の特色を発揮した米づくりを進めて参ります。また、熊本地震により多くの県民が気付かされた、お米がかけがえのない大切なものであることを忘れないようにするためにも、ごはん食の普及・拡大に今後ともしっかりと取り組んで参ります。



歴代会長が語る国民運動





ごはんを食べよう国民運動推進協議会設立記念座談会 「ごはんを食べよう国民運動への期待」(抄録)

平成11年4月23日 都道府県会館

中村 靖彦(NHK解説委員)【進行】

木村 尚三郎(東京大学名誉教授)

渡辺 文雄(俳優)

中村:ごはんとか米というのは、私の印象では、全国何処に行っても俺のところの米が日本一だと、こういう声が多いですね。

渡辺:旅をしまして、米・ごはんというのは、その土地というよりも恐らく泊まる家によって差があるように思えます。やっぱり非常に良いごはんに出会った時は、文句無しにその土地に好感を持つ。ですから、うちの町に来たらおいしいごはんを食べさせてやるという気概を持ってお米・ごはんの問題と取り組んだら、町おこし・村おこしの3分の1は片が付くような気がしますね。

中村:食材で俺のところが一番だというものが他にありますか。

渡辺:僕は4つあると思っています。まずお米ですね、ごはん。それと今頃の時期でいうと鮎。それから味噌。これは本当に何処へ行ってもうちの味噌はと言いますね。これはもう村単位ではなしに家単位で言います。それから、不思議なのは里芋。里芋は必ず何処へ行ってもうちの里芋はと言う。やっぱり今まで行ったことの中で共通なのは、その土地に生まれたもの、その土地に生えているものは絶対に旨いですね。

木村:大体何処へ行ってもですね、土地の物はおいしいですよ。渡辺さんがおっしゃいましたが、土地のものというのは、土地の空気や水或いは温度とか湿度に、ピタッと一致しているのです。その意味では、全国何処へ行ってもその土地の米が一番おいしいはずなので、それを東京その他に出荷することを考える前に、その土地で食べていただく、食堂であれ、レストランであれ、旅人に食べていただく。これをこれから中心に考える時代じゃないかと思えますね。

中村:今度の運動のきっかけは、震災の時のおにぎり、おむすびの味だったということですが、おにぎりは不思議なものです。不思議なというのは変だけども、本当にあれだけのものでおいしいんですね。

渡辺:おいしいものが世の中にいっぱいありますが、おいしさの質ということをちょっと考えてみた方がいいと思う。僕は震災の時のおにぎりもそうだし、戦後の焼け跡で食べた闇のあの白い米は胃袋を満腹にするだけでなく、間違いなく心というものを満腹にしてくれました。やっぱり飢えというのは2か所あって、心の飢えというのは絶対にあります。だから心の飢えを満たすというア

ングルでやっぱり今の消費拡大という問題も取り組んで行ったら、門が開くような気がしますね。

中村:確かにおにぎりというのは、非常に安心感を与える。まさに今度の震災の時の各地域からの援助というのは、そういう意味で良かったんでしょうね。

木村:おむすびというのはお米を結んだものなんですけど、同時に心も結んでおりますね。すめらぎって言い方が天皇についてありますが、あれはすぼめるって意味で、ばらばらの心を一つにすぼめるのをすめらぎ或いはすべらぎと言うのです。元になっているのは、皇室のお米です。昔から稲作があって、そしてそれを元に人々が結ばれたんで、別に権力的に上から押さえつけて一つにしたのではないのです。そのようなおいしいものがあって、ごはんがあってお互いに結び合うという古来からの伝統がずっと今まできている訳です。これは要するに人と人の心が結ばれるという意味では日本の文化、宗教の原点になるものではないかと思えますね。

渡辺:日本人とお米は長い付き合いでしょ。だから人間の方で変に甘ったれているところがありますね。お米と人間の付き合い方、もう1回見直して、きちんとお米の持っているものを引出す努力ということを人間がしないといけないのではないのでしょうか。これだけ皆さんごはんに関心を持ち始めたならば、今がチャンスだから、そういう運動を展開するのもいいんじゃないかという気がしますね。

渡辺:僕は、お米のこととかごはんのことについてね、何となく知っているようなつもりになっているけど、意外や意外、知らないことがかなり一般の消費者の方にはあるんじゃないかなあ。生産者の方からごはんというのはこういうもんなんだとか、お米はこういうもんなんだって、例えばお米の歴史なんか聞いていると面白くて、飽きないぐらい面白いですよ。そういうようなことを、生産者の方からもっと情熱を持って発信していくことが大事なんだと思えますね。これはごはんじゃないんですけど、例えばぶどうを作っているところでも観光農園とか、サツマイモでも観光何とかがあっていうのがいっぱいあるじゃないですか。僕はあれだって、観光というのはやめて学習にすべきだと思ってますよ。学習というと堅苦しいから嫌だと思う人がいるかもわかんないけど、学ばって非常に楽しいことです。例えば学習農園のよう

なものを増やして、つまり農業全体に対して、もうちょっときちんとした関心を持たせるような学習をする、それがなんとなく国民運動につながっていくんじゃないかという気がします。

やっぱりきちんとしたことを理解してもらうことがまず基本じゃないかと思えますね。

木村: 植物であれ、動物であれ、作り育てる喜びを知れば、人々の心を捉えるはずですよ。文部省も学校ファーム、学校農園を、これ最初はフランスが熱心にやったようですけども、これからやろうとしていて、実際自分で作ったお米を自分で食べてね、不味いわけないですよ。これ最高に旨いに決まっているので、お箸を給食の時に持って来てもらって、ごはんを食べていただく。教育委員会も土地のお米、土地の野菜を学校給食に使う。自分で作ったものをまず積極的に食べていただく。これをやれば荒れる学級などは絶対に無くなると思います。植物や動物はこっちの言うことを聞きませんから、向こうに愛情を注がないと育たない。それが一番の教育にこれから絶対になると思います。それをやれば、人々の、まさに子供たちの心が健全になると同時に、日本の食って一体何だろうかと肌身に染みて感じるようになりますね。全身を刺激し、全身で考える、農業体験を是非これからやってもらいたい。それがこれからの農業観光になると思う。

中村: ごはんを食べよう国民運動というのは、農業・農村をもっと知ろうという国民運動に結びつくものだと思うんですよ。おっしゃるように、知識のない人がいっぱいいますから、そういう方々に本当はそういう知識、学ぶとは楽しいことだということを普及していくことが必要だと思います。もう一つはですね、この間木村会長の元で私達議論した基本問題調査会の中で、自給率の引き上げのための数値目標の話が出ました。基本法が成立すればそれに伴って基本計画が出て、その中に自給率何パーセントを目指すかということが出るわけですが、簡単に言うと自給率を上げるためにはごはんをいっぱい食べて肉を少し減らせば上がるんですよ、かなり。だけど、強制的なことはできないから、一体どうしようかと議論したんですが。一方で、食生活が日本人の場合ごはんという炭水化物があったから健全だったんだけど、大分脂肪の比率が高くなってきた。世代によってはもう危険水域を超えてしまった。そっちの方からガイドラインみたいなものを作ったらどうだと、今度基本法に入りました。つまり自給率を下げると、健康は損なうわけじゃないから。やっぱり強制的に食生活を左右はできないけど、健康の面どうです、こうなりますよっていうことをですね、ガイドラインでも何でもいいんですが、長い目でみれば自給率の向上になるんじゃないかという気がしています。私は、ごはんを食べるだけでなく、今申し上げました農業・農村を知るとということの意義を、今の食生活の中で訴えていくということは、この運動の今日的な意味じゃないかなという気がしてるん

です。

木村: 例えば中山間地域に、どうやって人に来てもらうのか。来りゃ楽しいに違いない。でも、中山間地域なんか、農業体験でもどうやったら俺の所に人が来るのかと、こういう話になりますよね。13世紀のドイツにザクセンシュピーゲルというのがあります。北ドイツの法律書なんですけど、こういうことが書いてある。穀物を採る(盗む)と死罪なんですけど、13世紀だから穀物の無い時代ですから。しかし旅人が馬で旅をしていて、馬が腹が減って動けなくなった時は、道に片足を掛けて刈り取られるだけの麦は刈り取ってよろしい。これを詰め込んだじゃいけないのですが、馬に食わせる分ですね。要するに山でガス欠になった時に無料ガソリンスタンドがあるとかいう話です。これを、中山間地域でやって足掛けた分だけ果物採ってよろしいとなったら、人來ますよ。大都会の近郊でそういうことやったら皆丸坊主になっちゃいますが、中山間地域では魅力ありますよ。やっぱり引っ張りこまないといけませんので。そういう魅力を大いに考えたらいい。

中村: 学ぶだけでなく、そういう実利もあると。

木村: フランスのブルゴーニュ地方といって、ワインの王様ができる場所があります。そこに高速道路が通っているんですが、高速道路の料金所、つまり車が必ず止まる場所。周りはブドウ畑しかありません。そこに今ですね、5ヘクタールの大きな産業考古学館が建っています。5ヘクタールもありますから、ぐるぐる回っていると腹減ります。腹減ると、どうせ車止めたんだからちょっと飲んで、食べてね。そうするとその土地のことが分かりますし、それから消費も伸びます。この高速道路つまり人が沢山出たり入ったりする所と、正に中山間地域がですね、こういう形で結び合うんですよ。そういう施設はこれから、まあ道の駅というのがありますが、もうちょっと車との関係を考えて、そのような施設を作っていけば、土地の振興に役に立つんじゃないかと思えますね。

渡辺: 今、木村先生がおっしゃったように、地域おこしをやる時には、具体的なことを考えないといけない。一番具体的なものは、今先生がおっしゃったようにショーウインドウですよ。ショーウインドウのない店に入らないですよ、人は。お客が入って来るようなショーウインドウを作ったら、それだから道の駅もショーウインドウに成り得ます。それから、今日はおむすびの話が散々出たけど、よく考えたら、おむすびって持ち運びが出来るじゃないですか。だから、おむすびの復権をした方がいいですよ。おむすびはもっと高級なところにも出てくればいいと思いますよ。

中村: 今日は、ごはんとかお米とか地域とかいろいろ面白いお話を伺って本当にありがとうございました。これからご一緒にこの国民運動をひとつ充実してやっていきましょう。どうもありがとうございました。



ごはんを食べよう国民運動推進協議会講演録
「早寝、早起き、朝ごはん運動に向けて」(抄録)



平成19年6月19日 虎ノ門パストラルホテル
川勝 平太(静岡文化芸術大学学長/肩書きは当時のもの)

文化力について

文化力って何でしょうか。文化力っていうのは、いわばその軍事力っていうのが、人を殺す、殺傷する、家を破壊する、環境を破壊するということで、外に出れば破壊する力、外に向かう力ですね。そして、経済力も安くて、いいものつくって、外の市場、国際市場を席卷していくという外に向かう力ですけど、文化力っていいなあと思わせる力ですから、引きつける力です。美しいってやつですね。いいなあ、こう思わせる力。これが、文化力だと。

朝ごはんの大切さ

今、教育再生会議、第一次報告、第二次報告、そして最終的には、恐らく6334制の見直しも含めて、相当な思い切った改革案が出されるかと存じますけれども、そこです、陰山先生という岡山の小学校の校長先生をされて、今は、抜てきされて立命館大学の教授で、立命館がつくった小学校の校長先生をされていますが、この人が百ます計算で有名であると同時に、もう1つ彼は非常に馬力のある方で、早寝早起きする子、朝ごはんを食べている子と、遅寝遅起きで朝ごはんを抜いてくる子との成績を比べたわけです。あちらこちらで。そうすると、驚くべきことにどこにおいても同じ結果が出たわけです。早寝早起きして朝ごはんを食べてきている子は成績がいいんです。そして、夜更かしをして朝寝坊して朝ごはんを食べられないで来た子は、成績が低いんですよ。これは関係があるというわけです。そして、どう関係かという、夜遅くまでゲームをしていると。そして、朝は眠たいから起きられないので、ごはんを食べないで学校に行く。体育の授業で、あるいは4時限目の時間になったらお腹が減って集中力がなくなるから、

学校の授業を聴いていないので、それで自然に成績が落ちるといって、早寝早起き朝ごはんという生活習慣は、学力を上げるのに不可欠だということを、データを挙げてみんなに言ったわけですね。それで、なるほどそうかということで、我々は早寝早起き朝ごはんじゃなくちゃいかんということになったわけです。

実は早寝早起き朝ごはん運動があるわけですよ。会長はどなたかご存じですか。有馬元東大総長、元文科大臣です。そして、副会長が2人ほどいらして、その一人が陰山さんなんです。そして朝ごはんを食べよう国民運動は、その後塵を拝するわけにはいかないでしょう。朝・昼・晩ごはんといいたいんですけども、晩ごはんは晩酌のイメージがあるので、一応、子どものことも考えて夕ごはんというようにしてですね、何も朝ごはんだけではあるまいと。早寝早起きして、きっちりとお父さん、お母さんとできれば一緒にごはんをいただいて、そして元気に行って来ますと言って学校に行くと。

さて、ちょっと話を変えますけれども、文化力を上げるというお話をしたい。その文化力を上げるというのは、日本に対する関心が高まってきているということも関係しております。日本は今まで、欧米にキャッチアップをすることをやってきた。しかし、基本的にですね、幕末からやってきた欧米へのキャッチアップは、大体1980年代にほぼ終えて、我々は欧米諸国から一目置かれるし、欧米以外の諸国からはあこがられる、注目をされる。内外のすべての諸国から注目をされるという、そういう国になっております。

日本の食文化とは？

住文化だって、我々はコンクリートのところに入れられた。ところがですね、やっぱり木がいいなということで、今、注目されていますよね。そういう文化への、日本

の文化への回帰といいますが、見直しというもののの中に、実はこのごはん運動も位置づけることができるというふうに思うんですね。実はごはんを食べるといっても、これは単にごはんを食べるだけかということですね。ごはんがあって、おかずがあって、そしてお茶というものがありますね。これは、みんなセットになっているわけです。こういうセットとして、いわば文化複合としても、難しい言葉でいうと、そういうものとしての食文化の一環、一番の基礎をなすごはんという、それを見直すという時期にきているのではないかと。食文化、朝・昼・晩と、ごはんとして食べるということに、その日本の食文化の基礎がある。

明治期になりますと、日本の食文化、それから作法、茶の湯、庭づくり、そうしたものが確立いたします。つまり、日本の食文化も住文化も衣料文化も衣食住の文化、これが確立したのではないかとこういうふう思うわけです。その中心をなしたのが米だったということなわけです。米の復活というのは、実は、恐らく食事としてはいろんな食べ方がされるでしょうけれども、茶の湯における、最初にですね、今回も、今日お昼にごはんをいただきますが、まずお茶が出ると。そして、しばらくするとお弁当が出て、そして最後にまたお茶が出ました。最初に薄茶を出して、そしていろいろと歓待してですね、最後に濃茶をいただいて、そのときにどこでいただくかということ、廻り庭ですよ。自然なんですね。そこの中でいただく。そして、それぞれ器、それから出すもの、そうしたものについて、ご主人の方が心を配るということをしているわけです。

それがですね、朝・昼・晩ごはんの背景にある文化だと。食文化だと。これはですね、今、我々は室町末までに中国の文明を入れ切った。そして、今、平成の初めぐらいまでに西洋の文明も入れ切ったと。言いかえますと、東洋の文明にあこがれてそれを入れ切って卒業した。そして、また西洋の文明を入れ切って、そして卒業した。そして、我々は世界からすごいねと、中国人からもアメリカ人からも、ヨーロッパ人からもすごいねと言われて、気がついたら日本の文化、カラオケだとか漫画だとか、あるいはそのファッションだとかですね、そして日本食、これが世界に出ていっているんです。

食育運動の意義

本場でどういうふうにして日本食を食べて楽しんでいるんですかということは、当然、我々自身が、これをいわば体系的にきちっと見せないといけないということではないかというふう思うわけです。ですから、もうテキストは実はどこにあるかということ、北海道の農業と沖縄のサトウキビの農業とは違いますから、それぞれみんなその土地の特産品があって、それに応じたその食文化をつくり上げていますから、それが全体として日本の食文化というものになっているわけであります。多種多様な形でこう見せてさしあげるといって時期にきている。そのためには、自分たちのことを知らねばならない。自分たちのことを知るということは、実は、テキストがもはや教科書にないということです。教科書はどこにあるかということ、現場にある。自分たちの地元にあるということであります。

そして、そういう運動の1つが実は食育運動です。給食を授業というふうにしてとらえかえすということですね。そして、ここでこういう国民運動、ごはんを食べる国民運動を推進されている方が、単に農業の発展のために、自給率を上げるためっていうことではなくて、日本の食文化というものを子どもたちに継承させるための先生として、それをいわば広く文明論的な観点からですね、これはどこに出しても恥ずかしくないものなのだという、そういう観点で、我々はこの食文化を見せていくという、そういう段階にきている。テキストは、もはや教科書ではない。

その意味で、ごはんを食べるといってわかりやすい言葉だけれども、最終的にはこういう食育ドリルなどがむしろこれからの日本の教科書になって、それがうまくいくと、今度はそれが韓国語にあるいは中国語に、英語に、フランス語に訳されてですね、こういうふうにして日本というものから学ぶと。かつて、我々が向こうの地域おこしの学問を学んでこちらの大学で学んでいるように、日本の国づくりというものが学ばれる時代が、やがてやってくるという。そのテキストは、我々の自然の中にある。私はこう考えております。



お米の消費を拡大するには



林 良博(東京農業大学教授/肩書きは当時のもの)

20年前には18兆円であった農業総生産額が、数年前からその半分の9兆円にも達しない状況を見るにつけ、わたしは農業生産物が安すぎるのではないかと思いつけてきたが、米の消費拡大を期待する立場からすると、米価を元に戻すことはできないという思いも一方にある。もちろん、これ以上の急激な米価の低下を避けるためには、生産調整を断固として継続する必要があるが、国の方針に協力しない地方にペナルティを課するというやり方は、しばしばマスメディアが叩くように、日本人の性格に合わないものである。もっと日本らしいやり方で生産調整ができないものかと考えてきたが、需給調整達成者に所得補償交付金を交付するというやり方は、より成熟した制度と考えられる。叱って育てるよりも褒めて育てるほうが良い結果が得られるというのは、子どもの教育において、またイヌの躾において、よく知られている事実であり、それら(子どもやイヌ)に学ぶことは決して恥ずかしいことではない。

ごはんを食べよう国民運動推進協議会

わたしが会長を務めている「ごはんを食べよう国民運動推進協議会」は、その名のとおり、ごはんを食べて健康的な生活を維持すると同時に、日本の農業・農村の活性化を推進するための協議会であるが、平成7年1月17日の阪神・淡路大震災の際、食べ物もなく、不安のどん底にいた被災者が、ボランティアの善意による炊き出しのごはんやおむすびに助けられ、主食である“お米”を通じて農業の大切さを実感したことが契機となって設立された組織である。

これまで協議会が特にちからを入れてきたのは、世界最古のファーストフードとされるおむすびの消費を拡大することである。そこで協議会は、阪神・淡路大震災発生日の1月17日を「おむすびの日」と定め、2001年に第1回「おむすびに関するアンケート」を実施した(回答者7,089人)。その結果、「おむすびの具として好きな

もの」のベスト5は、「梅干」、「鮭」、「鯉節(おかか)」、「明太子」、「たらこ」の順で、1位「梅干」が18.3%、2位「鮭」が17.4%と、他の具を圧倒していた。

興味深いのは、第11回おむすびの日アンケート(2011年)では1位が「鮭」26.2%、2位が「梅干」15.9%と、順位が逆転したことである。動物性たんぱく質に対する嗜好が高まったのであろうか。いや、もともと鮭のほうが好きだったが、値段が安い梅干のほうが親しみやすかったのか。いずれにしろ、たった10年間で1位と2位が逆転してしまうというのは、「食」は保守的である面と、変わりやすい面の両面をもっていることを如実に示しているのではなかろうか。

その証拠に、2001年のベスト5は、すべての世代で全体と同じ順序であったのに対し、2011年には、全体と同じ結果を示したのは40代と50代のみで、10代から30代までは2位に「梅干」ではなく「ツナ」を選んでいいる。そもそも水気や油気の多いマヨネーズを具に入れることは「おにぎり界」のタブーであったが、若者の嗜好に合わせるように、コンビニのおにぎりコーナーには「ツナマヨネーズ」をはじめ、多種多様な具のおにぎりが並ぶようになった。

このように日本人の多様化する嗜好に合わせて「おにぎりの具」を変化させることは、お米の消費拡大を願うものとして大歓迎である。凝り固まった方針しかだせない運動は、衰退の一途をたどることを考えると、おにぎりの具の多様化は好ましいかぎりである。

どうしたら国民に知ってもらえるか

「ごはんを食べよう国民運動推進協議会」は2011年11月に山形弁で有名なタレントのダニエル・カール氏を招いて「次世代へ引き継ごう豊かな農山漁村」と題する講演会を企画した。カール氏は、昨年3月の東日本

大震災について海外報道があまりにもデタラメな内容を伝えたことに怒り心頭で、「YouTube」で怒りを世界に発信したことは記憶に新しい。さすがに昨年11月には怒りも収まっていたが、カール氏の東北の農山漁村に対する熱い思いが伝わってくる素晴らしい講演会であった。しかし問題は、彼の素晴らしい講演を聞いた人があまりにも少なかったことである。良い企画を立てても、それが空振りになることがあるが、これもその一例といえよう。

そこで協議会は、平成23年から25年の3年間の中期活動方針をどのように展開するかについて検討をした。中期活動方針は以下の3点である。(1)ごはん食を中心とした日本型食生活の推進。(2)東日本大震災からの復興と、米作り・農村の再生。(3)米の更なる消費拡大を図るため、米粉と日本酒の消費拡大。

(1)は、協議会の会員が各地で地道な活動を展開しており、たとえば日本食料理教室、ごはん食推進レシピコンテスト、ごはん食出前講座、おむすびコンテストの実施、ごはん食推進標語募集などがある。協議会はまた、「日本食文化のユネスコ無形文化遺産化推進協議会」に加入し、日本食文化のユネスコ無形文化遺産登録に向けた取り組みを積極的に進めることにした。(2)については、協議会そのものが阪神・淡路大震災を契機に設立されたこともあって、東日本大震災の被災地産米販売キャンペーンや、農村復興ボランティアへの参加・物資の提供を積極的に進めている。問題は(3)米粉と日本酒の消費拡大をいかに進めるかである。

お米の消費拡大に対する各都道府県の取り組み

全国でもっとも米の消費量が多い静岡県は「和産和消」を推進しており、年間米購入量は浜松市が全国1位、静岡市が全国2位となっている。こうした実績をもつ両市から他の地域が学ぶことが少なくないことは言うまでもない。また北海道は、「ゆめぴりか」のおにぎりの新商品販売と合わせて、イオンなどの民間企業と連携を強化していくという。頼もしいかぎりである。

一方、米粉の消費拡大はどのように達成できるのだろうか。

各都道府県の代表は、口をそろえて「小麦粉の代替ではなく、米粉としての独自商品として考える必要がある」と指摘する。米粉を使った料理のレシピ、上手な使

い方や米粉を利用するメリット(小麦粉と比べて品質上のよい特徴)について、もっと情報を提供すべきであるし、米粉の利用が増えれば、食料自給率が向上し農村の活性化に繋がるという社会貢献的なイメージづくりを全国レベルで展開する必要があるという。また、米粉と結びつかない異業種(例えば、商店街等)と連携して米粉商品を紹介し、その良さをPRしてもらう機会を創出し、消費者に対する訴求力を高めていくことが重要であると指摘する。すべてもっともな意見である。

一方、日本酒の消費拡大について和歌山県からは、「日本酒イコール親父の飲み物というイメージの払拭が必要」というきつい指摘がなされた。「おしゃれとか、健康的とか、とにかく良いイメージを付加しなければ消費は拡大しない」という。それは山形県からの「多様な飲み物が普及する中、悪酔いするなど日本酒のイメージが低下している」という指摘や、主婦連合会からの「女性の飲酒量は増えていると思うが、その種類としては、ワイン、発泡酒、焼酎が多いようで、日本酒をあげる人が少ない」という感想とおなじ脈絡の話である。

ノンアルコールの日本酒はつくれるか

酒米山田錦の生産量は全国1位の兵庫県は、「酒業界では、発泡酒、第3のビールや、格安ワイン等の価格競争が展開されており、価格面で割高の日本酒の消費量は伸び悩んでいる」という。また、清酒が基幹産業と位置づけられている新潟県でも「全国的に清酒消費量が減少し、アルコール飲料の嗜好性が、低アルコール化している」と嘆く。

このような状況を打破するために、積極的な外国客の誘致を進めるなかで、「観光・日本食」と連携した取り組みを行うこと、具体的には、こういった場面で、こういった食に日本酒が合い、こういった飲み方がいいのかといったストーリーを提案することが話し合われた。さらに海外における日本食ブームと連動して、日本酒の輸出拡大への支援を協議会の活動の柱に置くことも話し合われた。

こうした方針にもとづいて協議会は運動を進めるが、同時に日本酒業界に対して「新たな提案」を行うことも必要ではないかとわたしは思う。たとえば、「アルコール飲料の嗜好性が低アルコール化している」と嘆くだけではなく、嗜好が低アルコール化しているのであれば、



それに合わせて「低アルコール日本酒」や「発泡日本酒」の商品開発を積極的に行うべきではないか。「アルコール濃度11%以下の日本酒をつくるのは困難」という話をかつて聞いたことがあるが、それを達成した酒造メーカーがあるし、乾杯用に発泡日本酒をつくったメーカーもある。

日本酒業界において、若い人材が新しい発想で日本酒づくりに取り組み、「マッコリ」に席卷されつつある低アルコール領域を奪い返すことができるのではない。さらに言うならば、ビール業界が達成したように、ノンアルコール日本酒が登場したならば、もっと多くの日本酒ファンを獲得することができるのではなからうか。いまや既存の常識に囚われているときではないとわたしは思う。

ごはんを食べる若者、食べない若者

4年ほど前、東京大学農学部前のラーメン屋のオヤジに話を聞いたら、半ライスしか食べない男子学生が依然として多いだけでなく、道路工事に従事している若者ですら、昼食にラーメン一杯で済ますことが多いという。ラーメン・ライスならともかく、ラーメンだけでは米の消費拡大につながらない。一方、これは予想外のことであったが、半ライスなどという中途半端な注文をする女子は少なく、彼女らはごはんを残さず食べるという。男子学生よりも女子学生のほうが頼りになるという、この頃の大学教員の共通認識を証明する事例がここにもあった。

しかし例外もある。法学部に進学してきた兵庫県の農村出身の男子学生は、ジャンクフードや甘いドリンクを買わないかわりに、夕食はいつも麻婆豆腐ライスと野菜炒めライスの二食を注文するという。二食の注文であるから、当然ライスがふたつ付いてくる。この話をオヤジに聞いていたので、いつかその光景をみてみたいと思っていたら、ある日偶然に出会うことができた。彼が席に座ると、オヤジは黙ってふたつの大きな中華鍋を使って麻婆豆腐と野菜炒めをつくり始めた。同時に出来上がった二品とふたつのライスを前にして、彼は黙々と、しかし本当においしそうに食べ始めた。

彼は兵庫の田舎で、お米をたくさん食べて育ったのであろう。こんな若者が財務省や農林水産省に入省してくれて、食料・農業・農村政策に携わってくれることを心から願う。

新たな食料・農業・農村基本計画

3年以上も前になるが、食料・農業・農村政策審議会は、新たな基本計画を作成するよう農水大臣より諮問を受けた。当時、審議会の会長であったわたしは諮問を謹んでお受けしたが、実のところ頭が痛かった。なぜなら、「日本の農業は過保護である」という神話をいまだに信じている日本人が少なくないからである。この神話がいかに欺瞞に満ちたものであるか。東京大学農学生命科学研究科の鈴木宣弘教授が言うように、日本の農業が「過保護」といわれるほど手厚く保護されていたならば、自給率が40%まで落ち込むことはなかったはずである。財界の一部と勉強不足のマスメディアがつくりだした嘘によって、農業者の心が傷ついただけではなく、カロリーベースの食料自給率が先進国で最低クラスに転落してしまった。新たな基本計画が、自給率を50%に復帰させることを明記したのは当然の成り行きであった。これを達成するためには、お米の消費拡大を図ることが何よりも重要である。

ところで、わたしは公益財団法人・山階鳥類研究所の所長として秋篠宮文仁親王殿下のご研究のお手伝いをしているが、殿下は野鳥以上に絶滅の危機にある在来家禽・家畜の将来を心配されている。なぜなら、家禽・家畜はヒトの手によって作りだされた生き物である以上、彼らが絶滅の危機にあることを看過できないと考えておられるからだ。そして平成15年4月、殿下が提唱された「生き物文化誌学会」が設立された。ここでいう生き物とは、単なる生物ではなく、人とのかかわりの中で生きる動物や植物であり、稲はその典型といえる。在来の生業活動にみられる豊かな知識や技術を継承するためにも、お米の消費を拡大することは最重要課題といえるであろう。

転載 特Aへの道&米の消費拡大方策[平成24年版]
(発行:一般財団法人日本穀物検定協会)

資料編

ごはんを食べよう国民運動推進協議会会則

第1章 総則

(名称)

第1条 本会は、ごはんを食べよう国民運動推進協議会と称する。

(事務所)

第2条 本会の事務所は、兵庫県農政環境部内に置く。

(目的)

第3条 本会は、国民一人ひとりが“お米”を通じて、これまで先人たちが営々として築いてきた豊かな食文化、美しい日本の自然を将来に継承し、いつまでも健康的な生活が送れるよう、消費者をはじめ生産者、学識経験者、団体・企業、国や地方公共団体などが一体となった国民総ぐるみによる運動(以下「国民運動」という。)を推進することを目的とする。

(事業)

第4条 本会は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) 国民運動の普及啓発に関すること。
- (2) 国民運動に関する情報の収集・提供に関すること。
- (3) 会員相互の交流の促進に関すること。
- (4) その他協議会の目的を達成するために必要なこと。

第2章 会員

(構成)

第5条 本会の会員は、本会の趣旨に賛同する団体、企業、都道府県、学識経験者とする。

(会費)

第6条 会費は無料とする。

(加入)

第7条 本会に加入するものは、所定の入会申込書を会長に提出しなければならない。

(退会)

第8条 会員は、脱会届けを会長に提出して、退会することができる。

第3章 役員

(役員)

第9条 本会に次の役員を置く。

- (1) 会長 1名
- (2) 副会長 若干名
- (3) 理事 若干名
- (4) 監事 若干名

(役員を選出)

第10条 役員は、総会において会員の中から選出する。

(役員の仕事)

第11条 会長は、本会を代表し、会務を総理する。

- 2 副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるとき又は会長が欠けたときは、あらかじめ会長が指定する副会長がその職務を代理する。
- 3 理事は、本会の運営全般について協議する。
- 4 監事は、本会の会計を監査する。

(役員の任期)

第12条 役員の任期は3年とする。ただし、再任を妨げない。

- 2 補欠により選任された役員の任期は、前任者の残任期間とする。
- 3 役員は、辞任または任期満了後においては、後任者が就任するまでは、その職務を行わなければならない。

(報酬)

第13条 役員は、無報酬とする。

- 2 役員には費用を弁償することができる。

第4章 会議

(会議)

第14条 本会の会議は、総会、理事会及び幹事会とする。

(総会)

- 第15条 総会は、会員をもって構成し、年1回開催するほか、会長が認めた場合、随時に開催することができる。
- 2 総会は、会長が招集し、その議長となる。
 - 3 総会は次の事項を審議する。
 - (1) 中期活動方針に関する事
 - (2) 事業計画及び収支予算に関する事
 - (3) 事業報告及び収支決算に関する事
 - (4) 会則の改正に関する事
 - (5) その他本会の運営に関する重要事項に関する事

(総会の決議方法)

- 第16条 総会の決議は、出席した会員の議決権の過半数をもって決し、可否同数のときは、会長がこれを決する。
- 2 総会の決議は、会員の出席による方法に代えて、文書その他の方法をもって決することができる。

(理事会)

- 第17条 理事会は、会長、副会長及び理事で構成し、本会の運営に関する重要事項を協議し、総会に議案を提出することができる。
- 2 理事会は、必要に応じて、会長が招集する。
 - 3 理事会は、総会の指定したものについて、専決処分することができる。この場合、総会に報告をしなければならない。

(幹事会)

- 第18条 幹事会は、会員の中から会長が委嘱した幹事で構成し、理事会で定めた方針に従って会務を運営する。

第5章 顧問

(顧問)

- 第19条 本会に顧問を置くことができる。
- 2 顧問は、会長が委嘱する。
 - 3 顧問は、必要に応じて建議、助言する。
 - 4 顧問の任期は、これを委嘱した会長の任期期間とする。
 - 5 顧問は、無報酬とする。
 - 6 顧問には費用を弁償することができる。

第6章 会計

(会計)

- 第20条 本会の活動に要する費用は、協賛金、助成金、その他の収入をもって充てる。
- 2 本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。
 - 3 会長は、毎会計年度終了後、すみやかに総会に事業報告及び収支報告をしなければならない。

第7章 解散

(解散)

- 第21条 本会は、総会において会員総数の4分の3以上の議決をもって解散する。

第8章 事務局

(事務局)

- 第22条 本会に事務局を置く。
- 2 事務局について必要な事項は、会長が定める。

第9章 補則

(細則)

- 第23条 この会則に定めるもののほか、本会の運営に関し必要な事項は、会長が定める。

附 則

(施行期日)

- 1 この会則は、平成11年4月23日から施行する。
(会計年度の特例)
- 2 本会の設立当初の会計年度は、第20条第2項の規定にかかわらず、平成11年4月23日から平成12年3月31日までとする。
(施行期日)
- 3 この会則は、平成23年11月4日から施行する。



ごはんを食べよう国民運動推進協議会歴代役員名簿

※役職・肩書きなどは就任当時及び平成30年度時点のみを記載

年度	平成11年度 (設立 平成11年4月23日)	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	
会長	木村尚三郎 (東京大学名誉教授)	→								川勝 平太 (静岡文化芸術大学学長)	→
顧問											
副会長	今井 通子 (医師・登山家)	→									
	貝原 俊民 (兵庫県知事)	→		井戸 敏三 (兵庫県知事)	→						
	野明 宏至 (財全国米穀協会会長)	→				野村 昭 (社米穀安定供給確保支援機構理事)	→				木村 良 (社米穀安定供給確保支援機構理事)
	原田 睦民 (全国農業協同組合中央会会長)	→			宮田 勇 (全国農業協同組合中央会会長)	→					
	渡辺 文雄 (栃木県知事)	→									
				橋本 昌 (茨城県知事)	→	寺田 典城 (秋田県知事)	→			松沢 成文 (神奈川県知事)	
理事	足立 己幸 (女子栄養大学教授)	→									
	荏開津典生 (千葉経済大学教授)	→									
	梶木 又三 (全国土地改良事業団体連合会会長)	→									
	清水 鳩子 (主婦連合会会長)	和田 正江 (主婦連合会会長)	→				吉岡 初子 (主婦連合会会長)	兵頭美代子 (主婦連合会会長)	→		
	祖田 修 (京都大学教授)	→									
	伊達 公子 (元プロテニス選手)	→									
	富山 和子 (評論家・立正大学教授)	→									
	中村 靖彦 (日本放送協会解説委員)	→									
	渡辺 文雄 (俳優)	→					→				
		秋田 幸子 (全国地域婦人団体連絡協議会会長)	→			中畔都含子 (全国地域婦人団体連絡協議会会長)	→				
					松谷 満子 (財日本食生活協会会長)	→					
							合瀬 宏毅 (日本放送協会解説委員)	→			
										嘉田 良平 (アミタ持続可能経済研究所顧問)	
									鳳 蘭 (女優)		
									平尾 誠二 (神戸製鋼フープ一部GM兼総監督)		
監事	竹本 成徳 (日本生活協同組合連合会会長)	→			小倉 修悟 (日本生活協同組合連合会会長)	→				山下 俊史 (日本生活協同組合連合会会長)	

平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度 (8.31現在)
林 良博 (東京大学教授)									林 良博 (国立科学博物館館長、 東京大学名誉教授)
川勝 平太 (前会長、 静岡県知事)									川勝 平太 (前会長、静岡県知事)
									今井 通子 (医師・登山家)
									井戸 敏三 (兵庫県知事)
									木村 良 (公社)米穀安定供給確保 支援機構副理事長)
	茂木 守 (全国農業協同 組合中央会会長)	萬歳 章 (全国農業協同 組合中央会会長)				奥野 長衛 (全国農業協同組 合中央会会長)		中家 徹 (全国農業協同組 合中央会会長)	中家 徹 (全国農業協同組合 中央会会長)
		渡辺 好明 (株)東京穀物商品取引 所代表取締役社長)							渡辺 好明 (公社)全国農地保有 合理化協会会長)
		高橋はるみ (北海道知事)							高橋はるみ (北海道知事)
									足立 己幸 (女子栄養大学名誉教授)
		野中 広務 (全国土地改良事業 団体連合会会長)				中條 康朗 (全国土地改良事業 団体連合会専務理事)		小林 祐一 (全国土地改良事業 団体連合会専務理事)	小林 祐一 (全国土地改良事業 団体連合会専務理事)
山根 香織 (主婦連合会会長)						有田 芳子 (主婦連合会会長)			有田 芳子 (主婦連合会会長)
									伊達 公子 (元プロテニス選手)
									富山 和子 (評論家・ 立正大学名誉教授)
									中村 靖彦 (東京農業大学客員教 授・農政ジャーナリスト)
			柿沼トミ子 (全国地域婦人団体 連絡協議会会長)						岩田 繁子 (全国地域婦人団体 連絡協議会会長)
			上谷 律子 (一般社団法人日本食生活 協会会長)						上谷 律子 (一般社団法人日本食生活 協会会長)
									合瀬 宏毅 (日本放送協会 解説副委員長)
									嘉田 良平 (四條畷学園大学教授)
									鳳 蘭 (女優)
		浅田 克己 (日本生活協同 組合連合会会長)							浅田 克己 (日本生活協同組合 連合会顧問)



ごはんを食べよう国民運動推進協議会会員名簿

(順不同)【310会員 平成30年8月現在】

〈企業(158)〉

【栄養補助食品メーカー】(1)

(株)ファンケル

【外食事業者】(7)

(合)おむすびカンパニー

(株)柿の葉ずし

(株)小僧寿し本部

(株)なか卯

日本クッカーリー(株)

まねき食品(株)

(株)吉野家

【加工米飯等メーカー】(8)

エスビー食品(株)

(株)コメック

佐藤食品工業(株)

全国農協食品(株)

テーブルマーク(株)

(株)ニチレイフーズ

(株)はくばく

(株)丸千

【ごはん食関連食料品メーカー】(6)

エム・シーシー食品(株)

(株)小倉屋柳本

東海漬物(株)

日東食品(株)

フジッコ(株)

ブンセン(株)

【醤油メーカー】(3)

ヒガシマル醤油(株)

マルキン忠勇(株)

ヤマサ醤油(株)

【食品機械メーカー】(1)

鈴茂器工(株)

【炊飯機器メーカー】(2)

東芝コンシューマ マーケティング(株)

パナソニック(株)アプライアンス社

キッチンアプライアンス事業部

【製菓メーカー】(1)

亀田製菓(株)

【清酒メーカー】(3)

菊正宗酒造(株)

沢の鶴(株)

(株)福光屋

【製袋メーカー】(6)

関西のむら産業(株)

ザ・パック(株)

大日本印刷(株)

常磐パッケージ(株)

ネクスタ(株)

(株)メイワパックス

【倉庫業】(2)

神明倉庫(株)

森本倉庫(株)

【農業機械メーカー】(7)

オークラ輸送機(株)

(株)サタケ

静岡製機(株)

ナラサキ産業(株)

日本車輛製造(株)

(株)山本製作所

ヤンマーグリーンシステム(株)

【農薬メーカー】(3)

クミアイ化学工業(株)

日本農薬(株)

BASFジャパン(株)

【肥料メーカー】(5)

朝日工業(株)

小野田化学工業(株)

セントラル合同肥料(株)

ジェイカムアグリ(株)

電気化学工業(株)

【米穀卸等】(81)

(株)アグリック

アサヒ物産(株)

荒井商事(株)

淡路米穀(株)

飯島米穀(株)

(有)飯塚精米店

伊丹産業(株)

(株)イチセ

茨城県食糧販売協同組合

エバーグリーン(株)

大分県米穀卸(株)

(株)大阪第一食糧

大阪糧穀(株)

岡山パールライス(株)

(有)小川屋米穀店

香川県食糧事業協同組合

鹿児島パールライス(株)

鹿児島米商(株)

木徳神糧(株)

(株)ギフライス

(株)九州むらせ

(株)京山

熊本パールライス(株)

群馬県第一食糧(株)

幸福米穀(株)

此花精米精麦(株)

坂出食糧卸協同組合

(株)サンフリード

(株)四国ライス

(株)下源

下関食糧(株)

(株)ジャパンラオフード

(株)純情米いわて

(有)白井米店

(株)神明

(株)杉田商店

西播米穀(株)

全農パールライス(株)

但馬米穀(株)

(有)てんち

東京食糧(株)

(株)トウバン

徳島県食糧卸協同組合

栃木県中央食販(株)

栃木県米穀卸(株)

(株)鳥取県食

(株)ナカヤマフーズ

(株)名古屋食糧

(株)成川米穀

(株)新潟ケンベイ

(株)西田米穀店

日本糧穀(株)

(株)ニュー・ノザワ・フーズ

(株)パールライス宮城

播州精米(株)

阪神米穀(株)

(株)ヒョウベイ

福岡農産(株)

(株)藤田食糧物産

(株)フジタ精米人

ふじた屋米穀(有)

(有)藤本米穀店

ベイクックコーポレーション(株)

(株)ベイハン

(株)細山商店

(株)マイパール長野

(株)マルエー食糧

(株)丸三

瑞穂糧穀(株)

南大阪米穀(株)

むすびちゃん

(株)むらせ

モリエ米店

(株)森光商店

(株)ヤマタネ

大和産業(株)

(株)吉野

(株)ライケット

ライスフレンド(株)

(津田物産グループ)

(株)ワールドフーズ

和歌山米穀(株)

【味噌メーカー】(1)

マルコム(株)

【その他】(21)

(株)エス・ピー・エス

(株)オフィスサカイ

NPO京都たけプロジェクト

(株)ブレイン・エス・ピー

(株)神戸新聞事業社

(農)コメッコ

(株)ジーエムピージャパン

(株)シャインフェール

(株)スマイル

(有)田中ファーム

NPO法人TINA

(株)トゥーエイト

(有)永井農場

西日本高速道路サービス・ホールディングス(株)

長谷川ファーム

畑口生産組合

張替海苔店

有限会社まきの

(有)横田農場

(株)ヨシケイこうべ

(株)ヨシケイ・ナラ

【団体(93)】**【農業団体】(11)**

全国稲作経営者会議

全国共済農業協同組合連合会

全国土地改良事業団体連合会

一般社団法人全国農業会議所

公益社団法人全国農業共済協会

全国農業協同組合中央会

全国農業協同組合連合会

一般社団法人農山漁村文化協会

兵庫県稲作経営者会議

兵庫県地域振興対策協議会

兵庫県農業協同組合中央会

【米穀流通団体】(10)

全国主食集荷協同組合連合会

一般社団法人全国食糧保管協会

全国米穀販売事業共済協同組合

一般財団法人日本穀物検定協会

一般社団法人日本精米工業会

日本米穀小売商業組合連合会

兵庫県米穀事業協同組合

公益社団法人米穀安定供給確保支援機構

宮崎県主食集荷協同組合

和歌山県米穀協会

【農機・農薬・肥料団体】(4)

全国農業機械商業協同組合連合会

一般社団法人全国肥料商連合会

一般社団法人日本農業機械工業

日本肥料アンモニア協会

【ごはん食関連団体】(7)

醤油PR協議会

(全国醤油工業協同組合連合会)

全国茶商工業協同組合連合会

全国味噌工業協同組合連合会

全日本カレー工業協同組合

公益社団法人日本茶業中央会

日本豆腐協会

紀州田辺うめ振興協議会

【医師会、栄養改善等団体】(5)

全国食生活改善推進団体連絡協議会

日本医師会

公益社団法人日本栄養士会

一般財団法人日本食生活協会

和食普及研究会

【消費者団体、生協】(6)

主婦連合会

一般財団法人消費科学センター

全国地域婦人団体連絡協議会

一般財団法人日本消費者協会

日本生活協同組合連合会

パルシステム埼玉

【PTA、子供会】(1)

公益社団法人全国子ども会連合会

【米穀小売団体】(6)

新潟県米穀小売商業組合

兵庫県米穀小売商業組合

奈良県米穀販売商業組合

和歌山県米穀小売商組合連合会

香川県米穀小売商業組合

山口県米穀商組合連合会

【その他関係団体】(9)

K-INTELLIGENCE

滋賀県米消費拡大推進連絡協議会

NPO法人食の未来を考える市民会議

富山県米消費拡大推進協議会

長崎県米消費拡大推進協議会

北海道障害者雇用拡大連絡協議会

石川県白山市

にいがた塩むすびプロジェクト

「おいでまい」委員会

【全農県本部・経済連】(34)

ホクレン農業協同組合連合会

全国農業協同組合連合会 青森県本部

全国農業協同組合連合会 岩手県本部

全国農業協同組合連合会 秋田県本部

全国農業協同組合連合会 山形県本部

全国農業協同組合連合会 栃木県本部

全国農業協同組合連合会 群馬県本部

全国農業協同組合連合会 埼玉県本部

全国農業協同組合連合会 神奈川県本部

全国農業協同組合連合会 富山県本部

全国農業協同組合連合会 石川県本部

全国農業協同組合連合会 岐阜県本部

愛知県経済農業協同組合連合会

全国農業協同組合連合会 三重県本部

全国農業協同組合連合会 滋賀県本部

全国農業協同組合連合会 大阪府本部

全国農業協同組合連合会 兵庫県本部

奈良県農業協同組合

和歌山県農業協同組合連合会

全国農業協同組合連合会 鳥取県本部

全国農業協同組合連合会 岡山県本部

全国農業協同組合連合会 広島県本部

全国農業協同組合連合会 山口県本部

全国農業協同組合連合会 徳島県本部

香川県農業協同組合

全国農業協同組合連合会 愛媛県本部

全国農業協同組合連合会 高知県本部

全国農業協同組合連合会 福岡県本部

佐賀県農業協同組合

全国農業協同組合連合会 長崎県本部

熊本県経済農業協同組合連合会

全国農業協同組合連合会 大分県本部

宮崎県経済農業協同組合連合会

鹿児島県経済農業協同組合連合会

【都道府県(47)】

北海道 石川県 岡山県

青森県 福井県 広島県

岩手県 山梨県 山口県

宮城県 長野県 徳島県

秋田県 岐阜県 香川県

山形県 静岡県 愛媛県

福島県 愛知県 高知県

茨城県 三重県 福岡県

栃木県 滋賀県 佐賀県

群馬県 京都府 長崎県

埼玉県 大阪府 熊本県

千葉県 兵庫県 大分県

東京都 奈良県 宮崎県

神奈川県 和歌山県 鹿児島県

新潟県 鳥取県 沖縄県

富山県 島根県

【学識経験者(12)】

足立 己幸(女子栄養大学名誉教授)

今井 通子(医師・登山家)

合瀬 宏毅(日本放送協会解説副委員長)

鳳 蘭(女優)

嘉田 良平(四條畷学園大学教授)

川勝 平太(前会長、静岡県知事)

伊達 公子(プロテニス選手)

富山 和子(評論家・立正大学名誉教授)

中村 靖彦

(東京農業大学客員教授・農政ジャーナリスト)

林 良博((独)国立科学博物館館長)

保田 茂(神戸大学名誉教授)

渡辺 好明

((公社)全国農地保有合理化協会会長)



ごはんを食べよう国民運動推進協議会歴代幹事名簿

※学識者は肩書き、団体は氏名、自治体は都道府県名を記載

年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	
学識者	嘉田 良平 (京都大学大学院教授)	(農林水産政策研究所研究調整官)			(放送大学客員教授)	(アミタ持続可能経済研究所代表)		(アミタ持続可能経済研究所顧問)		
	保田 茂 (神戸大学教授)			(神戸大学名誉教授)						
団体	主婦連合会	→								
	畠 テル子									
	全国地域婦人団体連絡協議会	→		菱木 純子	加藤さゆり	→				
	松下 直子									
	全国土地改良事業団体連合会	→		加藤 秀樹	大橋 巧	臼杵 宣春	→		小林 和行	→
	小泉 浩									
	全国農業協同組合中央会	→				平松 宏二	→			
	久保 信春									
	勸全国米穀協会	→			(社)米穀安定供給確保支援機構	→				
	志田 興厚				志田 興厚					
日本生活協同組合連合会	→		藤井 喜継	→		鈴木 陽一	川村 恵彦	→		
笹野 武則										
				(勸)日本食生活協会	→					
				上谷 律子						
都道府県	北海道	→								
	宮城県	→		福島県	→		青森県	→		
	栃木県	→		茨城県	秋田県	→			神奈川県	
	東京都	→		神奈川県	→			埼玉県	→	
	新潟県	→		石川県	→			富山県	→	
	愛知県	→		岐阜県	→			三重県	→	
	大阪府	→		京都府	→			奈良県	→	
	兵庫県	→								
	岡山県	→		広島県	→			山口県	→	
	福岡県	→		熊本県	→			鹿児島県	→	

平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度 (8.31現在)
(横浜国立大学 大学院教授)			(総合地球環境学 研究所教授)		(四條畷学園 大学教授)				嘉田 良平 (四條畷学園大学教授)
									保田 茂 (神戸大学名誉教授)
(茂木なほみ)									
寺尾 雅人	安達 修	奥田 透	原川 忠典		鹿嶋 弘律		長山 政道		全国土地改良事業 団体連合会 森井 秀之
生部 誠治	前田 健喜				元広菜穂子		木村 政男	加藤 純	全国農業協同組合 中央会 金原 由孟
			森嶋 道子	公益社団法人 に移行					(公社)米穀安定供給 確保支援機構 森嶋 道子
	伊藤 治郎				松本 圭司				日本生活協同組合 連合会 松本 圭司
									北海道
岩手県			山形県			秋田県			秋田県
千葉県			静岡県			茨城県			茨城県
福井県			新潟県			石川県			石川県
愛知県			岐阜県			三重県			三重県
滋賀県			和歌山県			大阪府			大阪府
									兵庫県
愛媛県			香川県			徳島県			徳島県
長崎県			大分県			宮崎県			宮崎県







神戸新聞グループ 新ライススタイルプロジェクト 事務局

〒650-8521 神戸市中央区東川崎町1丁目5-7 神戸情報文化センター14F
Tel. 078-562-7762 (土・日・夜を除く) 年中10時～午後5時 | ホームページ <http://www.shin-ricestyle.jp>

ごはんを愛べよう国産米産地推進協議会
ホームページ <http://www.gohans.jp>



キャッチフレーズ

「ごはんが好きな あなたが好き！」

「今日ごはんに会いましたか？」

「ごはん列島、おかわり自由。」



— 編集後記 —

ごはんを食べよう国民運動の開始以来、20年間にわたる全国の会員の皆様の熱意ある取り組みとご協力ご支援に対して、心から感謝し御礼申し上げます。

この間、事務局を兵庫県庁が担当させていただきましたが、一貫してご指導いただいた幹事長の嘉田良平先生には満腔の謝意を表したいと存じます。また、幹事として事業の企画・運営に参画していただいた団体、都道府県の皆様に深く感謝申し上げます。

米の消費動向や、食の嗜好・食生活の変化、農産物の輸入拡大など、様々な環境の変化の影響を受けつつも、農や食に関わる我々は、粘り強く対応し、次の世代に豊かな自然や安全で安心な食を引き継いでいかなければなりません。

その意味で、本記念誌に寄せられた代表8道県の寄稿文には、多くの会員に共通する農や食に対する思いが込められているように感じられ、結びの今後の抱負や決意の言葉に励まされました。

また、事務局として最も有り難く感じていることは、会員の継続的な取り組みによって、「おむすびの日」を大きく育てていただいたことです。おむすびの日の関連イベントが毎年多数のメディアにとりあげられ、国民運動の象徴的な事業になりました。

阪神・淡路大震災をきっかけに始まったごはんを食べよう国民運動ですが、前記の熊本県の寄稿文には、熊本地震の被災体験について、次のとおり綴られています。

「被災者の多くは暫くの間、これまで当たり前のように食べていた炊き立ての温かいごはんが食べられませんでした。やっと食べられた1個のおむすびは心にも体にも染み込み、改めてお米の大切さと、日常的にごはんが食べられる幸せに気付かされたところです」。

かけがえのないお米の大切さ。20年の時を経て、改めてこの運動の意義をかみしめています。

編集スタッフ一同

発行日	平成30年8月
編集・発刊	ごはんを食べよう国民運動推進協議会事務局 神戸市中央区下山手通5-10-1 兵庫県農政環境部内
印刷	菱三印刷株式会社



ごはんを食べよう国民運動



これから



すすり



おいしい



ごはんを